

日本スポーツ社会学会会報

Vol.49

Sport Sociology

目次

1.	第 17 回大会特集	
	・開催校企画シンポジウム	2
	・国際交流委員会企画シンポジウム	4
	・研究委員会企画シンポジウム	8
	・一般発表 I	10
	II	21
	III	28
2.	2007 年度総会報告	38
3.	理事会報告	40
4.	委員長会議報告	45
	編集後記	46

日本スポーツ社会学会
Japan Society of Sport Sociology
広報委員会 2008 年 7 月

1. 第17回大会特集

開催校シンポジウム

2008年3月17日

◆実行委員会企画 開催校シンポジウム「変わりゆく日本プロ野球」

日 時：2008年3月17日（月）13:00～15:00

場 所：中京大学名古屋キャンパス 4号館431教室

登壇者：二宮清純（スポーツジャーナリスト、スポーツコミュニケーションズ代表）

吉田国夫（千葉ロッテマリーンズ事業本部 営業部 営業担当リーダー）

柴田哲志（日本テレビ放送網 スポーツ局 スポーツ企画推進部長）

コメント：清水 諭（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

司 会：西山哲郎（中京大学現代社会学部）

今次大会の実行委員会は、2004年秋の球団数削減1リーグ化騒動以降、劇的に変化を遂げつつある日本のプロ野球の将来についてシンポジウムに取り上げました。

ここ数年、プロ野球のテレビ中継は地上波視聴率の低下が著しく、日本のプロ野球を支えてきたビジネスモデルは危機的な状況にあります。その一方で、札幌や仙台では球団の移転や新設があり、四国や北信越地方では独立プロリーグが創設され、千葉ロッテマリーンズを筆頭に既存球団でもJリーグの球団経営に範をとった地域密着化戦略が展開されてきました。こうした希望と失望の入り混じる日本プロ野球の現状と将来を考えることは、単に一業界の浮沈の問題ではなく、プロ野球選手の活躍に一喜一憂してきた日本の老若男女の生活問題でもあって、それゆえ本会で議論するのにふさわしいテーマだと考えました。

そういう狙いの下に今回集まっていたみなさんは、「変わりゆく日本プロ野球」のまさに当事者ともいえるべき人たちであって、現場から生の声を拝聴できる機会を設けられたことを喜びたいと思います。

当日はまず二宮清純氏に、メジャーリーグとの対比を念頭に置いて日本のプロ野球がおかれた現状を概括していただきました。次に、千葉ロッテマリーンズ事業本部の吉田国夫氏から、単にスタジアムの経営だけでなく周辺地域の街づくりにまで影響を与えてきたマリーンズの経営戦略についてご説明いただきました。そして、日本テレビ放送網スポーツ企画推進部長の柴田哲志氏には、メディアコンテンツとしてのプロ野球について、現状の問題点と今後の可能性について示唆をいただきました。その上で、お三方のご報告をベースにして、筑波大学の清水諭氏にプロ野球と現代社会の関わりについてまとめの言葉をいただき、本シンポジウムから得られた知見を総括していただきました。

そこから見えてきたことは非常に多岐にわたりますが、社会的に考えれば、要点は「日本社会における公共性の変容」であったと指摘できるでしょう。野球やサッカーに限らず、スペクテイタースポーツ

ツが一般にプロ化と地域密着化戦略を採用するようになった背景には巨視的な社会変動があります。公共性が、国や地方自治体によってではなく、市民セクターで実現されるべき課題となったことは、資本活動のグローバル化や新自由主義の普及と不可分です。国鉄（現 JR）や電電公社（現 NTT）の民営化が話題になった 1980 年代以降、郵政民営化を経て、現在では市民のボランティアな活動と私企業の営利事業の狭間に公共性を発掘していくしか、とりあえず希望が見いだせないのではないのでしょうか。

そうした時代の変化のなかでスポーツもまた形を変えて行こうとしています。アマチュアリズムが権威を失い、スポーツ研究のなかで経営マネジメントに対する注目が高まっていく現象は、そのひとつの表れでしょう。スポーツ社会学の立場から、そこにどう対処できるのか、プロ野球というポピュラーな話題を契機にそこに切り込んでいく糸口を見つけるのが今回の目的でしたが、それが成功したかどうかは聴衆の皆様のご判断にお任せします。

なお本シンポジウムの記録について、開催校で冊子を製作いたしました。入手を希望される方は、学会会員には無料で進呈いたしますので、送り先の住所と氏名を明記して下記のところまでご連絡ください。

〒470-0390 豊田市貝津町床立 101 中京大学現代社会学部 西山哲郎
nisiyama@sass.chukyo-u.ac.jp

「アジアにおける伝統スポーツと社会変動」

◆国際交流委員会企画 11時10分～13時10分<4号館3階431教室>

シンポジウム「アジアにおける伝統スポーツと社会変動」

- 発表 表 1. Prospects and Social transformations of Taekwondo in Korea
Park, Jin Kyung (Kwandon University)
2. 日本における伝統スポーツとしての相撲の近代化問題
リー・トンプソン (早稲田大学)
 3. 水泳の競技スポーツから処方・予防スポーツへの分化・拡大
野村武男 (筑波大学)

コメント 伊藤公雄 (京都大学)、未定 (韓国)

司会 黄順姫 (筑波大学)、山下高行 (立命館大学)

今日、アジアの国々のスポーツは、グローバル化の波の中で大きく変容しようとしています。衛星放送やインターネットによるメディアによって、欧米のスポーツ情報がリアルタイムで手に入り、われわれの生活の中に欧米のスポーツが急激に広がっていきました。また、情報だけではなく、人も国境を越えて活動を始めようになりました。今では日韓のアスリートが世界で活躍したり、逆に欧米のアスリートが日韓で活躍するということが珍しくなくなりました。このような社会変動の中で、とりわけ伝統スポーツは、グローバル化によって大きな影響を受け、その存続をめぐって大きく揺らぎ始めています。

そこで、今回の日韓研究交流シンポジウムは「アジアにおける伝統スポーツと社会変動」をテーマに、韓国と日本の伝統スポーツが社会変動によってどのように変容したのかを日韓両国から現状報告をもらい、これからの伝統スポーツのあり方について議論したいと考えています。

なお、本テーマは本年7月26日から29日に京都大学で行われる「第5回 ISSA 世界会議京都大会」のメインテーマ「Sport and Society at the Crossroads」を反映したものであり、そこで開かれるアジアセッションのテーマとも関連づけて継続的に追求していきたいと考えています。

<第1報告>

Prospects and Social transformations
of Taekwondo in Korea

Park, Jinkyung (Kwandong University)

Taekwondo is representative traditional sport, as it is military art on the foundation of inherent Korean thoughts and cultures, and is acknowledged all over the world by the values and excellence as sports and martial art. After name called 'Taekwondo' having been made for the first time in 1955, Taekwondo got a basis to develop by worldwide sports through 'Korean Taekwondo Association' (1959) and 'World Taekwondo Federation (1973) establishment.

Afterwards, Taekwondo was adapted to official Olympic sports of the 2000 Sydney Olympics in the tenth IOC general meetings after having just done firmly a base as international sports through showing an exhibition game of Seoul Olympics and Barcelona Olympics in sequence. And also Korean language was appeared in 4th language used in the Olympic events that joined to English, French, and Japanese.

Currently, Taekwondo populations are estimated to 70 millions (trainee included) from 188 countries, black-belt holders are over 6.5 millions, and masters dispatched all over the world reach to 5,000 people. Compared to traditional sports having been developed to the United States and British, Taekwondo have been shown unprecedented expansion in short periods in the modern sport history.

It was able to let short term develop by the martial arts of the world from the martial arts of Korea, because sportization of taekwondo, globalization strategy through international advance of masters, and concentration of capacity of the organizations collected synergy effect,

Be devoted to quantitative expansion than qualitative development in the processes that Taekwondo aims at globalization, and grow by sports, various problems are appearing to domestic and foreign problems. In outside, Interest decrease and impartiality propriety of the match is the cause of Olympic withdrawal crisis, in a domestic it is experiencing a trouble because of the continuous decrease of training population, flooded and dissonant organizations

This paper is to review the social transformation and its implication of taekwondo that is characterized to athleticism, sportization, and globalization, with the brief overview of historical legitimacy of taekwondo. In addition, this paper suggests the alternatives and prospects to overcome various crisis situations that currently Korean taekwondo is facing.

<第2報告>

日本における伝統スポーツとしての相撲の近代化問題

早稲田大学 リー・トンプソン

相撲は伝統スポーツとして認識されているのは、じつは近代化の結果である。近代化過程のなかで「伝統スポーツ」として仕立てられたからである。明治以降、相撲はスポーツ化すると同時に、「伝統」を強調するように変化してきた。国技館が建設され、優勝制度が導入され、取り組みの結果としての「引分」と「預り」が廃止され、不戦勝制度が導入され、全国組織の相撲協会が設立され、仕切り線が敷かれ、仕切り制限時間が設けられ、三賞（殊勲賞、敢闘賞、技能賞）が設置され、女性観客が許されるなどと同時に、横綱制度が成立し、土俵の屋根が神明造に変えられ、行司の式服も変えられた。しかし相撲の変化はもっと前からあった。17世紀に土俵ができ、18世紀の後半から土俵祭り、腰に横綱をつけた一人による土俵入り、弓取り式などは、興行のために取り入れられた。そして大相撲の原型とされている各地の寺社で行われる「神事」相撲は、じつは興行相撲の少なからぬ影響を受けているであろう。

大相撲はつねに時代によって変化してきた。その変化の推進力は、18世紀も21世紀も同じである。つまり、交通とコミュニケーションと経済の発達である。これらの過程においてまずいくつかの地域が「国」に統合され、大きな都市が登場し、大相撲はその都市で生まれ、明治以降およそ今のような形になった。今の相撲の形は昔の「伝統スポーツ」とみなし、「グローバリゼーションの波」に曝されているとみること、これまで相撲がたどってきたこの重要な過程を見過ごしてしまう。グローバリゼーシ

ョンもまた交通とコミュニケーションと経済の発達によって地域が統合されることの一つの究極の有様である。

では大相撲はこれからどう変わって行くのか。それは私たちがどのような相撲を見たいか、ということによる。お客さんがお金を払って見に行きたいような相撲、あるいは放映権料を払ってもいいとテレビ局が判断するような相撲、そういう相撲しか続かないであろう。となると、伝統を思わせるような儀式と、競争の原理が適当にミックスした、明治以降のこれまでのような相撲はこれからも続くと考えてるのが妥当であろう。

<第3 報告>

日本における水泳の処方・予防スポーツへの分化・拡大

筑波大学 野村 武男

日本における水泳の発展過程は採取生活時代における素潜り等から、戦国時代における戦略的な水泳が日本泳法として各地で広まった。このような歴史的背景から、近代水泳競技においても第二次世界大戦以前は鶴田、葉室選手等によるオリンピックの活躍は目覚ましいものであった。第二次世界大戦後には、「フジヤマのとびうお」の異名を持つ古橋選手の活躍は、世界中が注目した。しかし、東京オリンピック（1964年）では、過去の活躍からは遠く及ばず、日本水泳は惨敗した。その後、水泳競技の見直しが叫ばれ、全国各地にスイミングクラブが設立された。現在、約 2500 の私立のクラブが存在する。当初、競泳選手養成を目的としたが、徐々に水泳による健康づくりやリハビリテーション・予防医学的な運動療法としての「アクアフィットネス」が定着されてきている。スポーツ医学的な目的としての水泳は、今や精神的な「生きる力」を創出しはじめてきている。特に、高齢化社会が進んだ日本では、介護施設における健康づくりとして、アクアフィットネスが取り入れられてはじめている。

我々はアクアフィットネスとしての NPO（アクアライフ研究所）を立ち上げ、市町村における中高齢者の健康づくり、さらにはスポーツ選手のケア等を実践している。今回の講演では、我々の活動の一部を紹介し、アクアフィットネスがもたらす健康的な意義、さらには社会的な変容の実態について検討する。

方法論的ナショナリズムの諸問題
ーメディア言説とナショナリズムの共犯性を批判的に検討するー

◆研究委員会企画 16時10分～17時50分<4号館3階431教室>

シンポジウム「方法論的ナショナリズムの諸問題

ーメディア言説とナショナリズムの共犯性を批判的に検討するー」

司会と問題提起 小笠原博毅（神戸大学）

- 発表
1. スポーツにおける言説ーサッカーを中心にー
森田浩之（フリージャーナリスト）
 2. 「身体論的ナショナリズム」考
山本敦久（上智大学）
 3. 大相撲におけるナショナリズムの出現ーモンゴル出身力士をめぐってー
富川力道（モンゴル・ブフ・クラブ会長）

司会と問題提起：小笠原博毅（神戸大学）

あからさまな愛国主義や排外的なショーヴィニズムとは一見かけ離れたところで、スポーツを語る言説はナショナリズムを速やかに構築している。「カタカナばかりの外国の事ばかりでなじみが薄い」、「まずは日本のこと優先的に考えよう」、「やっぱり日本人なんだから日本のことがよくわかる」などの、一見何気ない言葉のやり取りにコミュニケーションの前提は、<日本>という共同性である。言説の対象と発話者、また言葉と発話者の位置の間に同質性を構築することがそのまま対象の「理解」と「承認」を保証するという考え方。これがネイションを舞台に繰り広げられるとき、私たちはそれを「方法論的ナショナリズム」と呼ぶことができる。このセッションでは、「とりあえず日本人なんだから」というしごくまっとうに聞こえる前提条件作りが、どのように他者を閉ざすメカニズムを作り上げているのか、さらにはより顕在的で排他的なナショナリズムの条件作りをしているのかを綿密に検証する。

スポーツにおける言説ーサッカーを中心に：森田浩之（フリージャーナリスト）

スポーツニュースは何食わぬ顔で、私たちに〈日本人〉であることを刷り込もうとする。「私たちは日本人である」という一体感と、ステレオタイプな「日本人らしさ」を言葉の裏側で伝えようとする。スポーツニュースにおける〈日本人〉のつくられ方を、日本人メジャーリーガーやサッカー日本代表の報道に探る。

「身体論的ナショナリズム」考：山本敦久（上智大学）

近年の身体論ブームを批判的に検証していく。江戸の物腰、ナンバ歩き、丹田など、失われた「身体」を取り戻そうとする言説とメソッド、またそれを押し上げていく保守的な機運に危機感を感じる。失わ

れた「身体」を復権させることで呼び出され、構築される「日本人」という図式について批判的議論を展開したい。

大相撲におけるナショナリズムの出現（モンゴル出身力士をめぐる）：富川力道

大相撲の国際化によって外国人横綱などは日本が想定する横綱像とはしばしばかけ離れてきている。それは、「相撲は国技である」「相撲は神事である」という伝統意識と心情と、大相撲を経済的成功の手段として利用する外国人力士との価値観の衝突とずれが起きている。そこから生まれてくる虚構なナショナリズム的な言説を探る。

一般発表

◆一般発表 I 15時10分～17時10分

1. メガイベント (Mega-event) 座長：高橋豪仁 (奈良教育大学)

山ノ口寿幸 (台湾師範大学)

Reconsideration on the Torch Relay of the Beijing 2008 Olympic Games

内海和雄 (一橋大学大学院)

オリンピックの批判・否定論の検討

黄 順姫 (筑波大学大学院)

W杯サッカー大会の異なる集合的記憶 -日本、韓国、在日コリアンの比較を通して-

黒田 勇 (関西大学)

メディアスポーツとしての「世界陸上・大阪」

メガイベント (Mega-event) 座長：高橋豪仁 (奈良教育大学)

メガイベントと称された本セッションは、多くの聴衆を集めて行われた。

2007年9月20日に発表された北京オリンピック聖火リレーの最終ルートには、「台北」の名前がなかった。山ノ口氏は、聖火リレーのルートから「台北」が外れた理由を、台湾外交部文書や中華台北オリンピック委員会公開文書等の文献資料から明らかにした。山ノ口氏は、中国と台湾の折衝のポイントは3つあると指摘した。それらは、台湾へのルートを第三国から入り第三国に抜ける国際ルートにするか、聖火リレーの際に沿道で使用される旗や歌はIOC執行委員会の規定に合致したものであるか、台湾を「中国台北」と呼ぶのかそれとも「中華台北」と呼ぶのか、の3点であり、最後の「中華台北」「中国台北」の呼称問題が、聖火リレールートから台湾が外れた最も大きな要因であったと山ノ口氏は結論づけた。この問題を根本的に解決する方法は何かとの質問に対して、氏はスポーツは政治的な動きと無関係に存在しえないのであるが、スポーツを通じた草の根レベルの交流によって理解し合うことが必要なのではないかと答えた。また、この研究ではどのような問いを立てているのかとの質問に対しては、「中華台北」「中国台北」を英語に訳せば呼称問題は生じないのであり、漢字文化圏におけるスポーツと政治との関連という問いを立てることができるのではないかと、答えた。

オリンピックの肥大化に伴い、1980年頃からオリンピックが社会科学の研究対象として取りあげられるようになった。内海氏は、オリンピックについての社会科学研究の研究史に取り組み、オリンピック問題を内発的問題と外発的問題に分けて把握した上で、オリンピックの批判論・否定論を類型化した。ひとつは、民族主義や国家主義あるいは競走否定論等の立場から、オリンピックを全否定するものであり、オリンピックのポジティブな面には目を向けない研究類型である。他方、オリンピック自体は否定しないが、オリンピックに伴って生じている問題を批判する研究類型がある。氏は、後者の研究が提示する批判は傾聴に値するものであり、これらの批判には誠実に対応する必要があるとする。そして、そうした批判に対応するためにも、オリンピックの実証的な平和研究がなされるべきであると内海氏は指摘する。前提としてオリンピックは善なるものであるというスタンスに立つことに問題があるのではないかと、ア prioriにそうした立場に立つことが社会科学なのだろうか質問に対して、内海氏は、資本主義社会において大きな政治・経済的権力を持つ勢力によってオリンピックが引っぱられている現実

かにあるのだが、一方で、小さいながらもオリンピック平和運動の勢力も存在しているのであり、平和運動の理念を如何にして実現していくのが重要であると答えた。質疑応答の最後に、東西冷戦が終わった今、オリンピックが持つ平和運動としての役割は変わっており、冷戦期におけるメガスポーツイベントの時代は終焉したのであり、オリンピックが起爆剤となって社会に何らかの変化をもたらすということはあるのではないのかという意見が出された。

スポーツ消費者は、日常生活世界の中での時間経過とともに、スポーツイベントを連続的、重層的に経験し、彼ら、彼女らが置かれた社会的枠組みにおいて、過去の経験を喚起し差異化しながら、新たな観戦体験を構成している。このようにスポーツ消費者を捉えた上で、黄氏は、2002年、2006年のワールドカップサッカーが社会の構成員に及ぼす影響を、時間の連続性、文化・政治・経済の変動というマクロなフレームワーク、場所・空間を巡る集合的記憶の変容という3つの視点から考察した。2006年ワールドカップサッカー大会について、在日コリアン、韓国の大学生、日本の大学生、計1,563人を対象にした質問紙調査を実施するとともに、土浦市や渋谷のスポーツ・バー、田中カフェや宮本カフェのイベント型スポーツ・バー、新宿大久保のコリアタウンでの参与観察調査、面接調査を実施した。その結果、ワールドカップサッカーについての集合的記憶や観戦態度は、日本の大学生、韓国の大学生、在日コリアンで異なることが明らかとなった。また、同じ在日コリアンの中でも、日本生まれであるかどうかや在日年数によって、違いが見られた。街頭応援の持つ意味とは何かとの質問に対して、黄氏は、韓国では2002年の日韓ワールドカップの時に応援はストリートでするものであるという集合的記憶が形成され、特にワールドカップ世代と呼ばれる若い世代によって新しいナショナルイメージが作られたと答えた。日本生まれの在日コリアンとニューカマーの在日コリアンとは集合的記憶が異なるとの結果が出ているが、高齢の1世と若い世代の2世・3世との違いはあるのかとの質問に対して、黄氏は、アメリカの2、3世の事例や北系の在日の人が韓国の応援をしていた事例等を紹介して、研究の進行状況を説明した。

2007年8月に、「世界陸上」が大阪で開催された。黒田氏・王氏・田中氏は、テレビ1系列と1つの全国新聞社がこのスポーツイベントを独占した結果、テレビと新聞を通じてどのような報道がなされ、どのような言説が構成されたのか、そして、中国のメディアは「世界陸上」をどのように描いたのかを報告した。量的な分析として、大会期間中の全国4紙を比較したところ、オフィシャルペーパーである読売新聞において、世界陸上関連記事が多く、また好意的な内容の記事が多く見られた。また各局テレビのスポーツニュースにおいても、TBS/MBSにおいて世界陸上の報道時間の割合が大きくなっており、公共的イベントとしての意味合いが希薄となっていた。質的な分析として、スター選手を作りだし、その選手を通してスポーツを伝えるという「個人化」が、室伏選手に対してなされており、全局でナショナルヒーローとして室伏選手が取りあげられていた。選手の家族や人生などの部分に焦点をあててストーリーを語ることでスポーツを伝える「物語化」が、MBSによってなされており、ローカルヒーローとして朝原選手が描かれていた。中国のメディア分析の結果、発展しつつある中国国家を象徴するヒーローとして劉翔選手が描かれていたが、日本メディアが行ったような「物語化」は見られなかった。フロアから、朝原選手の物語化について、こうした家族愛や支えに対する感謝といったモチーフは日本独特の物語化ではないかという意見が出され、これに対して、今回の大会では東京陸上の時のようなヒーローがいなかったため、あえてそうした物語化がなされたのではないかとの回答がなされた。メディア分析においては、何が報道されたのかよりも、何が報道されなかったのかということが重要ではないの

かという指摘に対して、本研究での問題設定はそれとは異なるものであり、また、報道されたことによって何が報道されなかったかということ推定するしかないのではないかと回答がなされた。各局での報道時間の違いは放映権料が絡んでいるからではないかとの質問に対して、地域のローカルニュースには放映権とは別の力が反映しているのであり、放映権を取れなかった局は世界陸上を取りあげること控えて、その効果を小さくしようとしているのではないかと回答がなされた。

本セッションでは、大変興味深い内容の発表がなされ、それに対して白熱した議論が展開された。知的好奇心を刺激するエキサイティングなセッションだった。 文責：高橋豪仁

2. グローバリゼーション (Globalization) 座長：山下高行 (立命館大学)

加藤朋之 (山梨大学)

蹴球の伝習 -トランスミッションとしての鉄道-

乗松 優 (九州大学大学院)

プロボクシングの政治学 -戦後日本外交における岸のアジア政策と東洋チャンピオン・カーニバルの展開-

西尾 建 (ラフバラ大学大学院)

グローバリゼーションと労働移動 -日本ラグビーとトンガ、フィジー、サモア-

伊藤央二 (順天堂大学大学院)

グローバル化時代における社会同化とスポーツ参与

蹴球の伝承 -トランスミッションとしての鉄道

加藤朋之 (山梨大学)

日本のサッカー史の発展に鉄道というテクノロジーの発達は、媒介としてなにをもたらしたのだろうか。本報告はこのような問題設定のもとに、明治期の蹴球（サッカー）が全国に普及していく様態を浮き彫りにしたものである。とりわけ明治 39 年に始まった、高等師範蹴球部員による師範学校での講習会の開催に着目し、蹴球部史を中心にその場面の意味を探求していく。結論として報告者が示したのは、それまで指導書などの文字を通して学んでいたものに対し、鉄道というテクノロジーの発展によって可能になったものは、「伝習」という生身の身体を通して行われた蹴球の普及であり、それは「先生から教えられ伝えられて学ぶ」という、体感的可視的経験としてすすんだこと。その意味は、「中央」から「地方」にむけて、単に人を輸送するだけでなく「ある思想」を運んだのであり、このような「中央から先生が来る - 上京して中央で蹴球を学ぶ」と言う構図の下に、「中央」 - 「地方」という権力構造を身体感覚として作り上げていったということであった。このような報告に対し、「伝習」は「伝播」の一形態に過ぎず、概念的に上下の関係にあり、日本の蹴球は「伝播」ではなく「伝習」だったとの指摘には疑問があるとの意見が出された。これに対し報告者からは、これまでの日本サッカーの歴史はフラットに「伝播」していくと言う描き方であったがそうではないのではないかと。あえて「伝習」を強調することで「先生」は誰なのか。「先生」というカテゴリーがつくられることで中央集権的構造がつくられていくことを見たかった、との返答があった。次回は「受けた側」からの資料でこの過程を明らかにしたいとの課題が示されたが、是非継続研究を期待したい。

プロボクシングの政治学；戦後日本外交における岸のアジア政策と
東洋チャンピオン・カーニバルの展開
乗松 優(九州大学大学院比較文化学)

戦後日本が反日感情を乗り越えて東南アジアとの協調関係を取り結ぶ際、プロスポーツ交流は外交政策上どのような位置づけを帯びていたのか。このことを明らかにするため、本報告では1957年東京開催の東洋チャンピオン・カーニバルを中心に、当該の政治状況のコンテキストと関連させその意味を分析している。本報告で鍵となるのは、当時の外貨不足から、国際大会の開催が制限されていたにもかかわらず57年の同大会は様々な政府の積極的な関与が認められると言う点であり、この矛盾した対応を、岸内閣の東南アジア政策と関連させながら明らかにしようとする。結論として示されているのは、戦後日本の東南アジア政策の障害になっていた反日感情の突破口としてのスポーツの外交戦略上の位置づけであり、他方、このような国家の介入を誘うボクシング界の能動的な動きである。スポーツ界と政界の折り合いは、「アジアにおけるスポーツ」という文脈で偶然に相互の利害が一致したために生じたものであり、最終的に担った「国家の権力装置」としての役割は、アジアへの再接近という時代状況の中でボクシング自らが選択した存在証明であったと結論した。大部の研究であるので質疑は様々な点に関して行われたが、とりわけ外交戦力と切り結ぶ様々なスポーツ・レジャー界の利害関係者の介在、実態は日比対抗戦に過ぎないものであったのにもかかわらず「東洋」という表記が当時の日本人のナショナリズムを刺激したこと、等々、様々なアクターや諸力が戦後の外交関係の再構築という構図の中でカーニバルを作り上げていったことが浮き彫りになった点、興味深いものがあった。

グローバリゼーションと労働移動；日本ラグビーとトンガ、フィジー、サモア
西尾健(ラフバラ大学大学院修士課程)

グローバル化研究の一要素として、近年スポーツ選手の労働力移動の実態的調査研究が進んでいるが、本報告は1995年のオープン化以降選手の労働異動が活発化しているラグビー、とりわけ日本における外国人ラグビー選手の労働移動の特徴を見ることを焦点としている。2007年度フランス大会参加国選手の活動拠点の集計からラグビー選手の労働力移動の状況を見ると、かなりの率で母国以外で活躍している選手が多き。とりわけ「南太平洋の小さな島国の選手」トンガ、フィジー、サモアの選手が世界各国で活躍している率が高い。その中でも日本で活躍している選手が多いことが特徴的である。とくにラグビーのW杯参加には国籍修得の必要はないにもかかわらず、これらの国からの選手は、日本国籍修得しているものが何人も見られるのが特徴的である。地域ごとに同じタイムゾーンのところではエリアができてくる傾向があり、この同ゾーンのところでは移動が活発化していくのではないかと推測される。質疑では、とりわけ日本で活躍する選手の特徴について議論が交わされたが、国籍修得と言う特徴も教育機会の提供と、その享受という、ラグビーだけの視点では捉えられない要素がある点。その意味では表面上の数値だけではなく、背後のアスレティクスカラシップの制度等も検討すべきである、等々研究上の課題設定に関する示唆がいくつか行われた。

グローバル化時代における社会的同化とスポーツ参与
伊藤央二(順天堂大学大学院) 野川春夫(順天堂大学)

グローバル化に伴い、外国人の共生課題は重要なものとなってきている。本研究はこのため、スポー

スポーツ参加が社会的同化にどのような影響をもたらすのかを調査することを課題とし、6ヶ月のフィールド調査からその関連について考察したものである。対象は人口の16%が外国人であり、有数の外国人集中地域である群馬県の特定の地域での日系ブラジル人を対象とした、群馬県警察主催の柔道教室を事例とし、参加観察、質問紙、および直接面接により調査を行った。調査は文化変容と構造的同化に焦点を置き、また直接面接などでは宗教など一般生活について調査を行った。調査の結果以下のことが言える。1) ホスト国の伝統的スポーツは、主流文化の価値や規範を含むため、少数民族の社会同化を促進する機能を持ち、外国人問題の解決に有効なアプローチになる可能性がある。2) スポーツ参加は少数民族集団の社会同化を促進する可能性を持つが、全てのスポーツに関して言えるわけではなく、同時期に調査した警察主催のフットサル大会の事例に見られるように、ブラジル人の日本社会への同化を抑制する面が見られる。この点、調査対象となる民族、スポーツ種目の特性を考慮する必要がある。3) 文化変容における「選択的文化変容」と同様に、構造的同化においても「選択的構造的同化」という概念が考えられる。

質疑は以下の点が行われた。一つは調査項目の点であり、親の影響、同地域の非スポーツ参加者との比較等、関連諸要因についても検討すべきではないかというものである。これについては、さらに多くの要因を調査する必要性をいくつかの事例と共に説明されたが、要因間の多面的双方向的影響が見られる点、今後のこの領域の調査の蓄積が必要と思われた。二つめは、各種スポーツごとの持つ固有の文化的、言語的差異と社会的同化との関連性についての問題である。これはフットサルと柔道という異なったスポーツ参加の観察事例にも見て取れたが、既に結論でも少し触れられているように、このような文化論的アプローチも今後のこの領域の研究課題の一つとなろう。三つ目は移民のポリシング問題をどのように捉えるのかと言うものである。この事例の場合エスニックマイノリティの同化問題を警察が主導していることの政治性をどのように考えるかと言う問題であるが、このことは社会的同化と社会統合との関連をどのように考えるかという極めて現実的な問題であり、この建て方は研究の枠組みのところで意識化していく必要があるように思えた。先駆的な研究であり、多様な実り豊かな議論が行われた。

文責：山下高行

3. 観光・ツーリズム (Tourism) 座長：松村和則 (筑波大学)

王 姿琪 Wang, Tzu-Chi (台湾師範大学)

The educational meaning of the overseas Educational Trip

劉 于琳 Liu, Yu-Lin (台湾師範大学)

Study of Taiwanese female backpackers' motivation

楊 奕璋 Yang, I-Wei (台湾師範大学)

SWOT Analysis of Sport Tourism of Windsurfing in Penghu

圓田浩二 (沖縄大学)

ダイバーはなぜ潜るのか？

1. Yu-lin Liuさんは、二人の女性大学院生（ステファン：24歳ネパール旅行、サンドラ：23歳フィンランド旅行）を事例として、彼女たちの単独旅行へと駆り立てる背景を探ろうとした。報告の最初に **Research Limitations** があって、「時間の関係で二人にしかインタビューできず、同じ背景を持った対

象者で・・・」と断り書きがあった。結論は、次の4点である。

- ①女性の一人旅に対して台湾特有の社会構造が持つ伝統的価値観からの抑制にもかかわらず、彼らはさらなる(海外)旅行への夢をかき立てる。
- ②彼らの旅行へのモチベーションは、次のステージ(結婚生活への移行?)への不確実性と不安と同居している。
- ③彼女たちは長女であったが、両親からこの単独旅行に対しての反対はなかった。
- ④生活経験の拡張、自己革新の実践、異文化に触れるチャンスの拡大などのモチベーションが最大のものであった。

2. I-Wei Yangさんは、新たな産業としての台湾スポーツ・ツーリズムが勃興し、運動、余暇、スポーツが旅行目的として非常に伸びてきている(48万8千人/2007年)ことに注目した。Penghu 諸島は引き潮の時は幾百という島が姿を現わす中国と台湾の間にあるリゾート地である。アトラクションやスポーツに関連する内容が「スポーツ・ツーリズム」を発展させてきている。Penghu 諸島は、玄武岩の切り立った絶壁を持ち、美しい景色と歴史的遺産、亜熱帯特有の文化を持つ。SWOT分析は、①強み、②弱み、③状況的利点、④問題点という視点からツーリズムの(商業的)展開を図ることをめざす。Yangさんは、特にウインドサーフィンの可能性を探り、①Penghuはこのスポーツに最適で、②台湾観光局、Penghu 郡政府はこのスポーツを奨励し、③今後のビジネスチャンスを大いにもたらすと結論している。

3. 圓田 浩二さんは、人口約1千人の沖縄座間味村に年間約8万人の観光客が訪れ、そのうち3~6割の人びとがダイビングを目的にやってくることに注目した。当地は、那覇からも近く、波浪に影響を受けない内海であるという利点がある。

スキューバダイビングのダイバー達は「フロー体験」を基礎に①水中写真を撮り、②水中の地形を冒険心を持って楽しみ、③潮流による「浮遊感覚」を楽しむという3つの志向性をもつ。さらに、ダイバー達のコミュニティが関東、大阪各地に作られ、特有の「里帰りツアー」なども企画されている。また、50近くもあるというダイバーズ「ショップ」がメディアとなって彼らのコミュニケーションの「場」を作り出している。

特に後者2人は「カリフォルニア・スポーツ」とも言われるダイビングやウインドサーフィンを扱っており、共通の関心をもって聞けたと思う。しかし、言語的な問題もあって十分な討論をすることは叶わなかった。スポーツ・ツーリズムの発展のためにというマネジメント的発想が台湾の報告者の特徴であるが、圓田さんはカイヨワの遊び論やフロー理論を背後仮説において議論した。司会者としては、もう少し社会経済的な背景や日本のリゾート開発の問題点との接点を意識して議論をしてもらいたかった。議論がかみ合うかどうかは分からないが、「スポーツ・ツーリズム」というテーマがスポーツ社会学の領域にいつの間にか入り込んできている。

最後に、理事会、研究委員会が早急に検討する必要があることだが、台湾の院生はある意味でスタディ・ツアーとして日本スポーツ社会学会を位置づけている。こうした「国際化」へ私たちの学会はどういう姿勢で対処したらよいのだろうか。 文責：松村和則

4. 体育教育 (Physical Education) 座長：白石義郎 (久留米大学)

佐藤和行 (筑波大学大学院)

ラグビー強豪校における選手につくられ方 - 「規律中心型」と「自主性中心型」の比較を通して-

野村 徹（東京学芸大学大学院）

「得」をする能力とハイパーメリトクラシー - 「3年B組金八先生」にあらわれた新しい運動の出来る子像-

原 祐一（東京学芸大学大学院）

「体育」という社会的行為の不思議さ - 「スポーツ的行為」と「教育的行為」の2重性-

野村 圭（東京学芸大学大学院）

「体育教師」のアイデンティティ・ポリティクス - 学校秩序と逸脱者の形成過程-

予定では4名の発表者であったが、発表取り止めが1名あり、3名の発表があった。

(1) ラグビー強豪校における選手のつくられかた - 「規律中心型」と「自立中心型」の比較を通して

全国大会での優勝経験のある2校にインタビュー調査をおこない学校の校風とラグビー指導方針との関連を明らかにしようとする発表であった。調査対象校のA工業のラグビー指導者は、「伝統」（ひたむきなタックルと粘り強いラグビー）と「規律・礼儀」を重視し、多くの部員は「礼儀」「信頼」「仲間意識」などを「部に入って大切にしているもの」にあげる。卒業後の進路は、ほとんどが就職である。他方、M学園は「問題解決」を重視する。部員も「判断力」を「部に入って大切にしているもの」にあげる。卒業後の進路は大学進学であり、「彼らに共通するのはラグビーは生活全領域にまたがるものではない。」発表者によれば、二校の違いは校風の違いによる。

質問は、二つあった。一つは学校史や進路状況も含めた「校風」とラグビー部活の指導方針との関連性についてである。すなわち、指導者が「校風」を指導方針の説明に使っているのではないか、どのような人が指導者となっているかという質問である。発表者によれば、指導者は部のOBであった。第二の質問は、ラグビースタイルと部員の意識との関連である。ラグビースタイルが部員の意識をつくっているというより、部員は指導者のことばをそのままの繰り返しているのではないか、という質問である。さらに、部員のハビタスはどうつくられるかという質問がなされた。

「規律中心型」と「自立中心型」は、多少とも強引な類型化かも知れないが、競技スタイルと校風の関連性についての興味深い発表であった。

(2) 「得」をする能力とハイパーメリトクラシー - 「3年B組金八先生」にあらわれた新しい運動のできる子

テレビメディアを題材とし、「運動ができること」がどのように評価されるのか、その変化を明らかにしようとした発表である。発表者によれば、番組の初めのころは「お調子者」として描かれた「運動のできる」生徒が、「徐々にリーダーシップを発揮する」ように描かるように変化した。この変化を説明する概念が「得」である。すなわち、運動ができる生徒の「力」は、「周囲にいる人々も含めて得」させる力であり、その力がはたらく社会的場が学級である。学級の他の生徒に得をさせることで、リーダーとして認知される。では、なぜ「得をさせる」能力が仲間集団で評価されるのか。それは、象徴界が減少したポストモダン社会では、「勉強の得意な子」と「運動の得意な子」とわかれていた評価基準が、「得をさせるという」即時的な評価基準だけへとハイパーメリトクラシーは、

質問は二つである。第一は、ドラマは作者の作為や価値観が反映するのであり、それは現実の学級で生起していることと別ではないか、という質問である。発表者の回答は、「金八先生」が人気番組であ

り、視聴者としての生徒たちが共感をもっているということであった。第二は、「周囲に得をさせる」ことと「リーダーシップ」は同じか、という質問である。発表者は、リーダーシップを仲間集団における「地位の高さ」とし、仲間集団に「得をさせる」能力が、仲間集団における承認を引き出すとする。

なじみのない解釈学とであったため、初めはフロアーに戸惑いがあった。もともと限られた発表時間で説明することに無理があり、学級という現実の集団の社会構造と集団力学と発表者の解釈図式との間を即座に理解することが困難であった。

(3) 「体育」という社会的行為の不思議さー「スポーツ行為」と「教育的行為」の二重性ー

体育という授業場面を対象とする。体育は「俗」という意味コンテクストの中にあり、生徒という役割規定が作用する社会的行為の場面である。他方、スポーツ的行為はプレイヤーとして行為することである。それは「夢中」や「投入」というスポーツ経験からすると「遊」の意味世界である。体育はスポーツ行為と教育的行為という異なった意味が二重写しになる社会的場である。「生徒する」役割と「プレイヤー」という役割を同時に担い、行為するという特殊な社会的行為の場である。

教科「体育」に視座を限定するのはなぜか、という質問がなされた。部活との比較をしたほうがよいという意見も出された。さらに、教科体育なら教材によって異なるのではないか、ゲーム的教材と身体運動的な教材では異なるという指摘もあった。着眼点はユニークで割目すべきものがあった。ただ、なぜ体育を考察の対象とするのか、なぜ二重性が問題なのか、という疑問が残った。また、ダブル・カップリングなどの分析概念のほうがより有効ではないか、という疑問も残った。いずれにせよ、これからの研究の発展を期待したい。

文責：白石義郎

5. ライフコース／ライフヒストリー (Life Course/Life History) 座長：千葉直樹 (北翔大学)

小林浩平 (東京学芸大学大学院)

体育教師にとって career とはなにか

須田俊之 (筑波大学大学院)

サッカーコーチの指導観における再帰的身体と美意識 ーいかにしてサッカーコーチは成熟していくのかー

鈴木文明 (市立名寄短期大学)

在日朝鮮人女性とスポーツの記憶 ー一世のハルモニ達のライフストーリーからー

後藤貴浩 (熊本大学)

スポーツライフの差異に関する研究 ーライフヒストリー分析を通してー

本セッションは、当初、四つの発表を予定していた。しかし、須田氏が発表を辞退したので、最終的に三つの発表がなされた。

まず、小林氏は、体育教師の専門的力量やキャリアについて明らかにするために、教員養成系大学付属中学校の461名に対して質問紙調査を行った内容について発表した。質問紙の内容は、体育教師としての実践的力量に関する33の質問から構成され、初任者とベテラン教師に分けて回答を求めた。小林氏も認識していたが、体育教師の力量・資質・キャリアといった用語の定義が曖昧な部分があった。体

育教師の専門的力量やキャリアを明らかにしたければ、中学校の生徒ではなく、現役の体育教師に質問紙調査やインタビュー調査をするべきではないかという質問がなされた。今後、専門用語の定義を明確にして、研究目的を明らかにして欲しい。

鈴木氏は、大阪の街かどデイハウス「あんぱん」と「さらんぱん」に通う在日朝鮮人女性に対してインタビュー調査を行い、その結果を報告した。回答者は、80歳を超える高齢者であった。調査目的は、①「孫基禎物語」と「力道山物語」を朗読し、在日朝鮮人の英雄と言われた人々や当時の事件に関する記憶を聞き取ること、②在日朝鮮人の高齢女性のライフストーリーを聞き取ること、であった。インタビュー回答者は、ベルリン五輪マラソン優勝者の孫基禎についてほとんど知らない者が多く、力道山の記憶はあるが当初から朝鮮人と認識していた訳ではないと答えた。こうした結果は興味深い内容であり、一般の在日朝鮮人女性がメディア・スポーツになじみがなかったことが明らかになった。在日朝鮮人に関する研究自体が少なく、多くの場合、在日朝鮮人の男性スポーツ選手について扱う著書や研究が多いことを考えると、朝鮮人女性の視点から在日の問題に焦点をあてたことに意義がある。

最後に、後藤氏は熊本県に在住する4名の中老年者（70代の男性2名と50代の女性2名）にインタビュー調査を行った内容について報告した。この研究では、地域社会や時代の影響と個人のスポーツ実践の関係を明らかにし、対象者の生活や経験に関わる客観的な事実の収集を行うために、ライフストーリーという方法を用いた。後藤氏は、ライフコース・データに基づきスポーツ実践のコーホート分析を行ってきたが、統計データから「個人（生活主体）の行為力」を読み取ることができないという理由で、スポーツ実践者のライフストーリーを調査することにした。後藤氏は、調査回答者の個人史を年表にして、スポーツ実践の理由を、「時代効果」、「コーホート効果」、「生活効果」、「年齢効果」、「地域効果」とそれぞれに解釈した。最後に、個々のスポーツ実践の違いを「主体の指向性（行為力）」という回答者の意志に基づくと結論づけた。今後、各効果とスポーツ実践者の主体性の関係がどのようになっているか、明らかにしていただきたい。

文責：千葉直樹

6. ボランティア (Volunteer) 座長：藤田紀昭（日本福祉大学）

稲葉慎太郎（神戸大学大学院）

スポーツ・ボランティアの活動内容からみた期待と満足－世界陸上 2007 大阪大会のケーススタディー

山口泰雄（神戸大学大学院）

縦断的分析によるスポーツ・ボランティアの期待と満足－世界陸上 2007 大阪のケーススタディー

前田博子（鹿屋体育大学）

非営利地域スポーツクラブのボランティア・マネジメントにおけるリーダーシップ理論の有効性

葉 盈蘭 Yeh, Ying-Lan（台湾師範大学）

The Development of Taiwan Sport Volunteers

F 会場では「スポーツボランティア活動内容からみた期待と満足－世界陸上 2007 大阪大会のケーススタディー」（稲葉慎太郎：神戸大学大学院、山口泰雄：神戸大学）、「縦断的分析によるスポーツボランティアの期待と満足－世界陸上 2007 大阪大会のケーススタディー」（山口泰雄：神戸大学）、非営利地域スポーツクラブのボランティアマネジメントにおけるリーダーシップ理論の有効性～その研究動向と課題～」（前田博子：鹿屋体育大学）、「The Development of Taiwan Sport Volunteer」（Yeh Ying-lan: National Taiwan Normal University）のスポーツボランティアに関する発表4題であった。

稲葉氏は世界陸上 2007 に関わったボランティアを一般観客対応、大会運営、専門技能活動の 3 グループに分け、それぞれボランティアをやる前とやったあとの意識の変化をみたものである。このうち一般観客対応グループは自分たちボランティアの存在と必要性を認知してもらいと考えている点が特徴的であること。大会運営グループと専門技能グループでは自らの知識や技能を活動に役立てることを期待し、これを満たされることによって満足していることが明らかにされた。全体としては非日常的な経験を通じて自己を成長させようとしており、人との出会いと非日常的経験に関して高い満足を示すことが示された。

山口氏は特に、ボランティアリーダーを対象として同様の調査を行い、さらに IP 分析により期待 (importance) と満足 (performance) の関係について発表された。多くのボランティアリーダーが『何事にも挑戦し、いろいろな人と出会い、普段得られない体験により自分自身も成長し、大会を盛り上げたい』と考えていること。概して満足が期待より低いこと、ボランティアを通じ、女性はより成長できたと感じているのに対し、男性はより貢献できたと感じていることなどが報告された。また、IP 分析の結果、高期待－高満足の層と低期待－低満足の二極化されていることが明らかにされた。ボランティアは自分の成長や大会・地域への貢献を期待し、活動を通じてそのことが達成できたとする一方で、大会運営やボランティアとしての必要性が理解されなかったと感じていることが示唆された。

稲葉氏と山口氏の発表はいずれも昨年行われた世界陸上 2007 大阪大会にボランティアとして関わった人たちのケーススタディであった。これまでどちらかという経験主義的に行われてきたスポーツボランティアの研究であるが、両氏は社会科学的な調査分析を用いることによって、この領域の研究を漸進させようとする意欲的なものであった。今回の調査ではボランティアの意識を明らかにするために「出会い」や「盛り上げ」「大会運営」など 17 項目の質問が準備されていた。ボランティアの魅力は人それぞれ異なるものであり、また、それだけ多様で類型化しにくい部分があると思われる。そうしたボランティア活動の不可思議な魅力を損なわないためにも意識調査をする際の質問項目には細心の注意が必要だと思われる。質問項目の妥当性を高めつつ研究が進むことを期待したい。

前田氏はさまざまなタイプのフォロワーがいる非営利地域スポーツクラブのボランティアマネジメントをみていくのには、状況によってリーダーシップの要件が異なるとする Hersey, Blanchard が提唱する SL 理論が有効であるとしている。ただしこの理論はこれまで経験的に語られることが多く実証的に示されることが少なかったため、実証性を高めることが必要だと言及した。本研究に関わるキーワードの説明に時間が費やされたため、SL 理論をどう適用していくかについての説明が十分できなかったのが残念である。また、用語や概念の使用にややあいまいな点が見られたように思われる。スポーツ振興基本計画に示されたように地域のスポーツクラブがいかにスポーツ実施率を上げていくためにも地域スポーツクラブにおけるボランティアマネジメントは重要な課題である。地域スポーツクラブにおいていかなるリーダーシップが必要とされるのか研究の進展が楽しみである。

台湾からの参加者 Yeh 氏の発表では台湾では年間約 2 万人の人がスポーツボランティアが活動しているもののその研究は十分されていないこと台湾のスポーツ担当部局がスポーツボランティアの養成組織化の促進を行っているがボランティアのニーズとのマッチングに問題が生じていることなど台湾におけるスポーツボランティアの状況が報告された。また、今後台湾で開催予定のデフリンピック夏季大会および ワールドゲームズにおいてもスポーツボランティアは非常に重要な役割を果たすものと考えられる。

小さな政府が言われて以来、ボランティアの重要性は高まるばかりである。スポーツ界においては以前からやボランティアによる大会運営が行われてきた。安く使える人という認識ではなく、ボランティアとスポーツ界がたがいに成長できるような考え方やシステムづくりは重要である。スポーツボランティアに関する研究が蓄積されこうした状況のモデルを提供できるようになることを期待したい。

文責：藤田紀昭

7. 消費主義とマーケティング (Consumerism & Marketing) 座長：菊 幸一 (筑波大学)

劉 漢賢 Liu, Han-Hsien (台湾師範大学)

The Influence of web game experience on the involvement of professional sports: A case study of NBA Fantasy.

江 建徳 Jiang, Jian-Guo (台湾師範大学)

A study of the effect of sport celebrities' achievement on the consumer's behavior of their endorsed sneakers: take basketball sneakers for example

朱 文増 Zhu, Wen-Zeng (台湾師範大学)

A Study on the Consumer Behavior of the Japanese Tourists to IBAF Baseball Olympic Qualifying Tournament (Asian Baseball Championship 2007)

本セッションのテーマは、「消費主義とマーケティング (Consumerism & Marketing)」である。第1発表は、NBA Fantasy という web game への参加が及ぼす実際の NBA へのかかわり方への影響を調査したものであり、チームへの関心、チームのスターへの関心、視聴率、話題の提供等のいずれもが高まり、結果としてプロ・スポーツをプロモーションする道具として有効に機能するというものであった。第2発表は、バスケットボールのスニーカーを事例として sport celebrities (スポーツ有名人) の名前を冠した商品が、彼らのパフォーマンスや成績によって消費者にどのように、なぜ影響を与えるのかが研究目的であり、結果としては有名人に対する identification (同一化) と彼らに対する憧れや知識の習得、自らのプレーに対する良い影響を期待していることが明らかになった。第3発表は、台湾で開催された野球のオリンピック・アジア予選を観戦に来た日本人旅行者を対象にして彼らの消費行動の特徴を明らかにすることが目的であり、結果としてパック旅行者より観戦を目的として来たコアなファンの方がグッズ等の消費が高く、ファンシップを高めることの重要性が認められ、台湾のスポーツツーリズムに関する政策の貴重な資料となったということである。

フロアからの質問は、質問紙法による質問内容の確認や半構造化面接法によるインタビュー内容のまとめ方、あるいは対象者の属性など基本的な方法に関するものが大半であった。第3発表については、日本人ツーリストのアジアにおける野球イベントへの参加状況と消費行動の特性を明らかにしようとしたものであり、発表や質疑応答も日本語で行われたこともあって15名程度のフロア参加があった。研究の形式や方法については、いずれの発表も一定の形式を整えてはいるものの、第1、第2発表はレビューの紹介だけで、その内容がどのように研究仮設や議論に影響を与えたのかは明確でなかった。もっとも重要な問題は、この3つのテーマが果たしてスポーツ社会学的研究にふさわしい内容と議論を展開してのかどうかという点である。もちろん、テーマの取り上げ方や分析視点の社会的関心によって、

消費やマーケティングは今日的な課題を提起する重要な領域を構成する。しかし、今回の発表内容では、少なくとも「消費主義」といったイデオロギの問題とそれが与えるマーケティングへの影響やそれらをめぐる社会的課題とスポーツとの関係についてはふれられていなかったように思われる。特に第1、第2発表は、スポーツ・マーケティングをめぐる諸要因分析であり、社会学的な議論に欠けているという感は否めない。

文責：菊 幸一

.....◆ 平成 20 年 3 月 18 日 (火) ◆.....

◆一般発表 II 9 時 00 分～11 時 00 分

1. メディア (Media) 座長：飯田貴子 (帝塚山学院大学)

李 政勳 Lee, Cheng-Hsun (台湾師範大学)

The Globalization of Sports Media in Taiwan: Nowadays and after Sports Lottery is Released

橋本政晴 (信州大学)

メディアスポーツは「社会問題」なのか？ - 「生活空間」からメディアスポーツを問い直す-

清水泰生 ((社)日本マスターズ陸上競技連合)

世界陸上の実況中継 -ことばを中心に-

白石義郎 (久留米大学)

『スラムダンク』における成長の言語ゲーム

The Globalization of Sport Media in Taiwan: Nowadays and after Sports Lottery is Released

李 政勳 Lee, Cheng-Hsun (台湾師範大学)

本報告は、台湾において 2008 年 5 月から実施されるスポーツくじが、スポーツメディアにどのような変化をもたらすかを、Globalization と localization の視点から、文献研究とインタビュー調査をとおし考察するものである。内容を大別すると次の 3 点である。スポーツくじの対象は、MLB、NBA のような海外プロスポーツであるため、スポーツの商業化をねらうメディアはくじの対象となるゲームの試合結果に焦点をあて、アマチュア、女性、学校スポーツは置き去りにされるであろうこと。そして、政治や経済により関心を払う台湾では、益々、スポーツ環境が悪化する恐れがある。スポーツの社会化を考えたなら、スポーツメディア従事者は、スポーツのグローバル化について熟考しなければならない。フロアから視聴率に関する質問の中で、MLB や日本プロ野球に所属している台湾選手がホームランを放った試合は、再放送をしても高視聴率を得るとの回答もあり、台湾のテレビスポーツの現状、くじ実施後の状況を凡そ窺い知ることができた。

メディアスポーツは「社会問題」なのか？ - 「生活空間」からメディアスポーツを問い直す-

橋本政晴 (信州大学)

本報告では、まずメディアスポーツ研究に関する蓄積を概観し、制作プロセスやテキスト自体が「抗争の場」であること、オーディエンスは押し付けられたテキストに内在するイデオロギーを無批判に受動するわけでないことを述べる。その上で発表者は、メディアスポーツ研究が分断された個人や全体社

会とは異なるコミュニティや生活の場、すなわち家族や地域といった共同で生活を営んでいる生活者に焦点を合わせることを避けてきたのではないかと問う。私に発表内容を十分咀嚼できる素養がないのだが、オーディエンス研究では分断されてはいても「生きられた経験」が能動的読みに繋がるのではないか、「生きられた経験」はまさしく生活の場から生み出されるものであるという問いと、制作プロセスに主要メディアに変わるパブリックジャーナリストのようなものが入れば、もっと異なる展開になるのではないかという素朴な問いをもった。次の機会にこの問いを報告者にぶつけ、論議をしてみたい。

世界陸上の実況中継—ことばを中心に—

清水泰生（(社)日本マスターズ陸上競技連合）

本報告は、1991年世界陸上東京大会と2007年世界陸上大阪大会のテレビ実況中継の特徴について、ことばを中心に検討したものである。発表では、まず2大会の比較をTV放送局、競技時間、インターネット、新聞、日本人・外国人選手の活躍から述べ、ことばに関する検討では、実況中継の文字おこしをした詳細な資料が配られ、注目点では映像も準備されていた。膨大な資料をもとに、時間をかけて分析されているため、同じ種目であっても、2大会での実況の違いが大変分かりやすく理解することができた。ただ、大会全般を通じて見出せる傾向や、特徴の要因を分析するまでには至っておらず、やや物足りなさが残る。メディア分析には多様な視点があるが、対象をことばに限定した場合であっても、発表者の立場性をもっと前面に出した、言い換えれば分析視点を明確にされた方が、研究としての面白みが増すのではないだろうか。

白石義郎（久留米大学）

『スラムダンク』における成長の言語ゲーム

発表者が体調を崩され、報告は行なわれなかった。

文責：飯田貴子

2. 社会政策 (Social Policy) 座長：森川貞夫（日本体育大学）

栗山靖弘（横浜国立大学大学院）

「体育の日」に関する歴史社会学的考察

金子史弥（一橋大学大学院）

スポーツ政策ネットワークに関する研究—UKの事例研究—

奥田睦子（金沢大学）

ドイツにおける総合型地域スポーツクラブへの障害者の参加システムの検討

岡田千あき（大阪大学）

国際協力分野におけるコミュニティ・スポーツ論の可能性

発表論題は4編、最初は栗山靖弘会員の「『体育の日』に関する歴史社会学的考察～日本における『体育』の起源をめぐって～」、次ぎに金子史弥会員の「スポーツ政策ネットワークに関する研究—UKの事例研究—」、次いで奥田睦子会員の「ドイツにおける総合型地域スポーツクラブへの障害者の参加システムの検討」、最後に岡田千秋会員の「国際協力におけるコミュニティ・スポーツ論の可能性」でした。それぞれの発表の概要等については「抄録集」および当日配布の資料・レジюме等でご確認いただくと

して個人的な感想と気になる点を記録にとどめておきたいと思います。

それぞれの題目のとおり「社会政策」という「括り」では少し無理があるのと発表時間は質問を入れて各 30 分弱ですので議論を深めるまでにはとても至らないという思いで席を立ちました。

栗山会員の発表では「体育の日」に関する歴史社会学的考察というよりは「体育」概念そのものの歴史的研究という印象を受けました。とくに「体育の日」の「体育」に、演者自身が研究目的に掲げた「学校体育とは異なる意味が、いつ頃、誰によって付与されてきたのかを歴史社会学的に考察する」までに達していないので今後に期待したいと思います。

金子会員のイギリス（UK）を事例とした「スポーツ政策ネットワーク」研究でしたが、個人的にはサッチャー政権以後のイギリスにおける地域スポーツ政策の変化にたいへん興味深く拝聴しました。しかし残念ながら具体的なイメージを把握するには基礎的知識に乏しい私には日本との対比において何を学ぶべきか、十分につかめませんでした。外国研究の難しさといえるかもしれませんが、日本での発表・紹介には「小さな政府」論が日本に置いても席卷している状況からも是非とも日本の地域スポーツ政策との関連を意識した研究であって欲しい気がします。

奥田会員の発表は金子会員よりは日本のスポーツ政策との比較を最初から意識したものであったように思います。「すべての人にとってスポーツは権利」であるという時に「障害者スポーツ」の意義などが明確にされること、それに演者もふれているように社会的背景が違い過ぎる場合には医療保険等の適応もストレートにはいかないものであり、さらには「ソーシャルキャピタル」という概念も日独との相違も感じられ、今後さらに深められることでしょう。

最後に、岡田会員の発表はこの間の一貫したスポーツにおける国際協力に関連した研究と連動したのですが、今回は日本におけるコミュニティ・スポーツ論との関連でそれが発展途上国への応用が可能かという問題意識からなされています。しかし率直に言って日本におけるコミュニティ・スポーツ論そのものが「貧困」「紛争」といった深刻な問題を抱えた開発途上国に比べて、日本のそれは地域課題、生活課題をシビヤーに意識されたものではないので最初から無理があるように私には感じられました。したがって今後は演者も指摘しているように「社会階層とスポーツ」あるいは「開発と文化・教育」といった視点からスポーツ問題を演繹的に政策課題にのっけていく方が近道ではないかと思われま

今回はあえて「社会政策」と銘打った発表ジャンルに分けてありましたが、これは個人発表を受け入れる前から大会実行委員会で意識して論文発表を求める方式でなければ、発表演題を受け入れた後にジャンル分けするのでは焦点の定まりにくいものになるおそれがあるかと思えます。最初から個別具体的なテーマにするか、はっきりとテーマ・ジャンルを明記した形でやるか、どちらかできちんとした方策を決めた方がいいように思いますが、いかがなものでしょうか。

文責：森川貞夫

3. 台湾のバスケット (Basketball in Taiwan) 座長：高橋義雄 (名古屋大学)

林子揚 Lin, Tzu-Yan (台湾師範大学)

The research on the development of amateur and professional basketball in Taiwan

陳駿安 Chen, Juan-An (台湾師範大学)

The research on the development of high-school basketball League in Taiwan

陳 麗安 Chen, Li-An (台湾師範大学)

A Study of Super Basketball League Experiential Marketing Strategy

李 姿萍 Li, Tzu-Ping (台湾師範大学)

Development of Women's Division A Basketball in Taiwan

担当セッションの発表4演題は、ともに台湾から参加した台湾師範大学の学生の発表であった。午前最初のセッションであり、残念ながら日本人研究者の参加はなかった。そのため、2名のスタッフ学生（タイムキーパーと部屋担当者）を参加者席に座らせ、座長である小生が同時通訳する形で発表をすすめた。スタッフ学生からの日本語の質問を座長の通訳で質疑する形で実施したが、発表者にとっては不満が残ったのではないだろうか。何かしら対応策を検討する必要がある。台湾では、バスケットボールが非常に人気のスポーツである。発表は、台湾バスケットボールの発展に関する調査、高校バスケットボールリーグの発展についての調査、スーパーバスケットボールリーグの経験価値マーケティング、そして女性のバスケットボールの発展についてであった。4名の方々が、日本スポーツ社会学会での経験をいかし、さらに研究を深めていくことを期待したい。

発表内容は、まず1) 林子揚「The research on the development of amateur and professional basketball in Taiwan」では、第二次大戦後を4ステージに分類し、アマチュアリーグの時代からプロフェッショナルリーグの時代を経て、現在はセミプロの状態にあることが報告された。各ステージの政治経済的な状況、チームを所有する組織の変遷、行政の介入についても報告された。プロからセミプロへと変化した要因として、台湾の経済危機がバスケットボールに影響していることが報告された。

次に2) 陳駿安「The research on the development of high-school basketball League in Taiwan」では、高校バスケットボールリーグの発展過程を4ステージに分類して報告された。特に、トップレベルの選手を供給する高校バスケットボールの位置づけ、そして大学への推薦入学の手段としてのバスケットボールの役割、さらにテレビ放映と企業協賛の影響が報告された。

そして3) 陳麗安「A Study of Super Basketball League Experiential Marketing Strategy」では、Pine II & Gilmore や Schmitt が提唱する経験価値マーケティングの考え方をスーパーバスケットボールリーグに適用した報告であった。座長の雑感であるが、社会学の視点というよりは、経営学の視点での研究と感じられた。

また4) 李姿萍「Development of Women's division A Basketball in Taiwan」では、台湾の女子バスケットボールの歴史が報告された。女子のチームは国営企業が中心に所有し活動しており、優勝するチームが特定化し観客も少ない現状も報告された。

文責：高橋義雄

4. ジェンダー (Gender) 座長：熊安貴美江 (大阪府立大学)

荒川和民 (スポーツライター)

近代スポーツにおける「男らしさ」を揺さぶる -榎本喜八の事例を通して-

鄭 稼棋 Cheng, Chia-Chi (台湾師範大学)

A study of job stress and coping strategies for female basketball coach in Taiwan

郭 雅婷 Kuo, Ya-Ting (台湾師範大学)

The study of the participating motivation and the gender role conflict in the female athlete:

Take “NTNU Volleyball Second grade group” for example

水野英莉（岐阜医療科学大学）

スポーツ達成における女性間の差異 -日・米の女子サーフィン選手の経験から-

今大会では、ジェンダー部門で4題の発表があった。

『近代スポーツにおける「男らしさ」を揺さぶる—榎本喜八の事例を通して—』（荒川和民氏）は、近代スポーツからの逸脱モデルとして位置づけられるプロ野球選手、榎本喜八の事例を文学を通して検討することにより、近代スポーツにおいて正当化されてきた「男らしさ」を逆照射しようとする試みであった。近代スポーツにおいて排除されるタイプの人を、「奇人」「変人」という枠組みで欄外に置くのではなく、むしろそうしたありようを「逸脱」とみなす近代スポーツに通底する勝利至上主義や過度の競争主義に対する問題提起を、文学批評からアプローチした研究である。

『スポーツ達成における女性間の差異 日・米の女子サーフィン選手の経験から』（水野 英莉氏）は、スポーツ達成における女性間の差異とその差異を生み出す社会的要因・過程を日・米の女子サーフィン選手へのインタビュー調査と参与観察をもとに検討したものである。今回の報告では、日・米間の女性の差異に着目し、日本の女性サーファーの競技達成を海外の選手同様に公平に高めることをめざしたうえで、日本における組織運営の課題が提示された。

上記2題は、ここ数年日本において着手されてきたスポーツにおけるジェンダー研究に、文学批評というアプローチや女性間の差異という視点を導入したことにおいて意義があると考えられる。

また今回は、台湾師範大学から2題の発表があった。

“The study of motivation and the gender role conflict in the female athlete - Take “NTNU Volleyball Division II” for example”（Kuo, Ya-Ting氏）は、女性競技者のスポーツ参加動機と女性の競技参加における役割葛藤を、台湾師範大学の2軍バレーボールチームにおける参与観察と半構造インタビューから明らかにしようとした。

“A study of job stress and coping strategies for female basketball coach in Taiwan”（Cheng, Chia-Chi 氏）は、台湾における高校の男子バスケットボールチームを指導するふたりの女性コーチについて、そのストレス源やストレス対処法などをインタビューを通して明らかにしようとしたものである。

台湾ではスポーツにおけるジェンダー研究は緒についたばかりということで、まずは女性のスポーツ参加にかかわるさまざまな困難がジェンダー分析の対象となっていることがうかがわれた。今回扱われたそれぞれのテーマも、そのスポーツ自体がもつジェンダー・イメージとのかかわりから、他のスポーツ種目やチームとの比較をとおして、よりいっそう台湾のスポーツにおけるジェンダー課題が明らかにされよう。

「ジェンダーとジェンダー関係は、社会におけるスポーツを学ぼうとする者にとって、中心的なトピックである。（Jay Coakley & Peter Donnelly,2004）」といわれるように、スポーツ社会学にとってジェンダー視点はもはや欠くことのできない重要テーマのひとつである。その意味で、今後のスポーツ社会学においても継続的にジェンダー研究報告がなされることを期待する。

文責：熊安貴美

5. 身体と環境 (Body & Environment) 座長：西山哲郎 (中京大学)

遊びの伝達における身体の役割に関する研究

宮坂雄悟 (東京学芸大学大学院)

共振する社会的身体 —その2—

小谷寛二 (福山平成大学)

スポーツの空間と生業の場の重複をめぐる「正統性」

—「環境調和型スポーツ」としてのスクーバ・ダイビング—

村田周祐 (筑波大学大学院)

登山の大衆化と山岳環境の保全

笹瀬雅史 (山形大学)

本セッションのテーマは「身体と環境 (Body & Environment)」ということで設定されていた。4発表をおおまかにわけると、前半のお二人が主に身体に焦点をあて、後半のお二人が主に環境に焦点をあてられていた。ただし、あとのお二人が使う「環境」という言葉には意味的な違いがあった。村田氏が地域の人間の営みを含んで「環境」を考えているのに対して、笹瀬氏の場合はもっぱら人間の営みからいかに自然を守るかという文脈で「環境」を考えておられた。この違いは、もちろんどちらかが正しいというものではなく、単に視点の違いを示すものである。

次に個々の発表に対してコメントすると、まず最初の宮坂氏は「遊び」をコミュニケーションの一形式として捉え、遊びを遊びとして成り立たせる文脈としての身体の働きに注目していた。これはある意味くスポーツ原論への挑戦であって、その意気込みを高く評価したい。ただし、取り上げられた事例が今のところ実験室的な状況に限定されているため、提示された仮説を論証するところまでには至らないので、今後の展開に期待したい。

2番目の小谷氏については、実社会のコミュニケーションにおける身体の意義を把握しようとする点で宮坂氏との好対照をなしていた。その一方で、身体の共振現象に注目する点では宮坂氏との共通点も見いだせた。小谷氏のユニークな点は、身体の共振が円滑なコミュニケーションを基礎づけることを称揚するだけでなく、それが時にはファシズム的な盲目的集団秩序を成立させてしまう危険も視野に入れている点であった。それらをどう弁別するかが今後の課題になるだろう。

第3の村田氏については、スキューバダイビングというスポーツが地域社会に持ち込まれる際に、いかなる政治が展開されたかを詳細かつ長期にわたるフィールドワークから明らかにされた。地域研究として完成度の高い本発表について、もし「ないものねだり」が許されるなら、そこにスポーツという実践にまつわる特異性が見いだせないものか、フィールドからすくい取ってもらえれば、さらに面白い研究になると思う。

最後の笹瀬氏の発表については、これも綿密なフィールドワークから、登山という行為が山岳環境にいかなる影響を与えているかを実証的に示していた。スポーツの実践から具体的な課題を掘り起こしている点では、先の村田発表にないものねだりしたことが、ここでは実現されていた。他方で、村田発表に見られた政治論的な視点がここでは希薄だったので、そこを補完されれば本研究はより深みを増し、あるいは政策提言にもつながっていくのではないかと想像を膨らませた。

6. レクリエーション&アミューズメント (Recreation & Amusement)

座長：リー・トンプソン (早稲田大学)

張 育綺 Chang, Yu-Chi (台湾師範大学)

The fusion of Taiwanese folk pigeon game and local culture: Take Dingjou and Honchie village for example

鄭 南雄 Jeng, Nan-Hsiung (台湾師範大学)

Case study: Show-wagon in Taiwan

范 欣宜 Fan, Xin-Yi (台湾師範大学)

The Fusion of Taiwanese Folk Pigeon Game and Local Culture:

Take Dingjou and Honchie Village for Example

Chang, Yu-Chi (張育綺)

National Taiwan Normal University Graduate School

百年以上も前から続いているといわれる台湾の南西部の二つの村が行う「紅 [月+卻] 笞 (hong-jiou-ling)」という民俗競技についての発表であった。約 1 キロメートル離れた相手の村に鳩「紅 [月+卻]」を運び、その背中に木製の笛 (笞) を縛り付ける。笛を背負わされた鳩が放され、出身村まで飛んで帰る競技である。野球のように攻守交代制で行われ、1 ラウンドは 2 日間かかる。全部で 18 ラウンド行われるが、悪天候やお寺の行事などで中止となることも多く、1 ヶ月半かかることもある。様々な大きさの笞があり、鳩より大きいものもある。1 ラウンドで運ばなければならない笞のサイズと数が決まっている。強い鳥は何回も往復する。

発表では主に競技の様子が説明された。事例として大変興味深い。ただし、ギアツが報告した「バリ島の闘鶏」のような地元文化との統合が指摘されたが、ギアツほど「深く」描写されていなかった。

Case Study: Show-wagon in Taiwan

Jeng, Nan-Hsiung (鄭 南雄)

National Taiwan Normal University Graduate School

台湾では「舞台車」(「show-wagon」と発表者が英訳) という商売は約 10 年前から成り立っている。3.5 トンから 15 トンまでのトラックを改造し、荷台に折りたたみ式の舞台を取り付け、30 分以内に設営できる移動舞台をつくる。様々な装飾や証明や LED までが取り付けられている。結婚式やお寺のお祭りや会社の親睦会などのパーティに出張し、様々なパフォーマンスで盛り上げる。フリーのショウガールは歌と踊りを披露し、服も脱ぐ。観客も舞台に昇り、歌や踊りを披露することもある。観客の参加はこの「舞台車」の特徴のようである。

発表では類似のエンタテインメントとの比較や歴史も吟味された。「舞台車」の特徴は移動性と俊敏である。伝統的な artistic floats や「子弟戯」の役割を受け継いでいると指摘された。社会の近代化と産業化に伴い、地域社会の秩序が崩れ、伝統的な芝居ができなくなったことは「舞台車」の普及の背

景にある。そして、舞台車の設営によって、ただの space が意味のある place に変更するという指摘もあった。同様に、舞台車の退去によって place が space に戻る。

事例報告に終わらないで、様々な観点から舞台車を検討した。

Research on the Relationship between Recreational Attractiveness
and Visitor Satisfaction and Loyalty of the Taipei Zoo

范 欣宜 (Hsin-Yi Fan)

National Taiwan Normal University Graduate School

台北市動物園の利用者を対象にしたアンケート（プレ調査）の結果が発表された。台北市動物園は1986年に現在の場所に移動する前の期間も含めば90年以上の歴史を持ち、台北市周辺のレクリエーション施設（美術館や博物館など）のなかで利用者が突出して多い。

調査では利用者の人口的特徴、利用の特徴、施設の魅力、利用者の満足度、そして利用者のロイヤルティを尋ねた。調査の結果は発表されたが、ここでその詳細を割愛する。ただし、満足度はそれほど高くないのにロイヤルティが高いという結果は、矛盾しているようで説明が必要であろう。

ディスカッションはサンプリング方法に集中した。

文責：リー・トンプソン

◆一般発表 III 14時00分～16時00分

1. コミュニティ (Community) 座長：山本教人 (九州大学)

江南健志 (京都大学大学院)

スポーツキャンプによる地域活性化に関する一考察 -三重県熊野市を事例として-

江口 潤 (産業能率大学)

大学キャンパスを拠点にした総合型地域スポーツクラブ

長津詩織 (北海道大学大学院)

体育・スポーツ活動と都市のローカル・コミュニティの持続性 -「ファイターズ通り商店街」を事例として-

スポーツキャンプによる地域活性化に関する一考察 -三重県熊野市を事例として- 江南健志 (京都大学大学院)

江南氏は、1990年代以降の「地域おこし」が、「上から」の政策から「地方の主体性」を尊重する政策へと思想的な大転換を経験したとし、地方のスポーツ振興をこのような新しいトレンドの代表例としてみる。そして、三重県熊野市におけるソフトボールとラグビーのスポーツキャンプ・イベントを事例に、聞き取りと観察による調査を行い、イベント関係者の「小さな」、「下からの」実践の積み重ねがイベント成功の要因であり、このような実践こそが地方の「主体性」といえるもので、地域活性化を考える際に最も重視すべきものと述べた。

これに対してフロアからは、熊野の事例から、どの程度一般的な「スポーツキャンプの可能性」を見て取ることができるのかとの質問がなされ、他の事例に対しては何も言えないが、小さな努力が大切であることを理解してもらいたいと述べた。このほか、スポーツキャンプを招致することで、地元の産業に何か変化があったのかとの質問もあった。これに対しては、具体的に目に見えるような変化はないが、

住民はみんな助かっていると思っているとの応答があった。

大学キャンパスを拠点にした総合型地域スポーツクラブ 江口 潤（産業能率大学）

江口氏の報告は、大学の物的・人的資源を活用した「総合型地域スポーツクラブ」をいかに実現できるのか、その可能性について検討することを目的としていた。具体的には、①総合型地域スポーツクラブに関する先行研究、伊勢原市のスポーツ振興方策、そしてS大学の学校方針とJクラブとの提携事業の検討を行い、②総合型地域スポーツクラブ設立のために行った住民調査の結果をレビューし、③マスタープランの内容を提示した。

この報告に対しフロアから、どのような「総合型」をつくりたいのか、そもそも「総合型」という言葉を使わなければならないのかとの質問があり、文科省の「総合型」にはこだわらないが、この言葉で地域が動くという意味で重要だと述べた。また、クラブがきっかけとなってスポーツを始める人がどれくらい存在するのか、いるとすればそのきっかけとは一体何なのかとの質問がなされた。これに対しては、学生がきっかけづくりの上で大きな戦力になっていると考えられる。学生自身にとっても、「マネジメント」の勉強にもなり有益だと応答した。

体育・スポーツ活動と都市のローカル・コミュニティの持続性 —「ファイターズ通り商店街」を事例として— 長津詩織（北海道大学大学院）

長津氏の報告は、札幌市A地区の「ファイターズ通り商店街」において、住民からみたプロスポーツチームの存在意義を探ることを目的としていた。地域住民からのアンケートや聞き取り調査を経て、この地域において住民相互のゆるやかな「つながり」を維持する「しかけ」として、健康づくりとファイターズが利用されていることが明らかとなった。そして、「つながり」を維持する活動が閉鎖的になってきているという限界があるにせよ、高齢者や単身世帯が増加する町内会と、後継者のいない商店街にとって、日常生活の「安全」確保のために地域的な「つながり」が必要とされていると結ばれた。

この報告に対して、言葉の意味をめぐる質問がいくつかなされた（たとえば、「体育・スポーツ活動」という言葉の使い方に関する質問や、「リスク回避」、「つながり」、「安心」という言葉の意味と、その相互関連に関する質問）。また、地域社会を構造的にとらえる視点が必要ではないかとの意見も出された。
文責：山本教人

2. ファン／観客 (Fan/Spectator) 座長：黒田 勇（関西大学）

王 止敬 Wang, Chih-Ching（台湾師範大学）

A study on the variation of spectator's composition of The Chinese Professional Baseball League
村上智恵（東京学芸大学大学院）

観客の視線とプレーヤーのパフォーマンス -舞台と競技場を比較して-

小林正幸（法政大学）

聖なるものの形骸化 -プロレスを事例にして-

高橋豪仁（奈良教育大学）

スタジアム空間の管理に関する研究 -プロ野球の特別応援許可規定について-

4人の研究報告は、それぞれにファン／観客の実態、視線、そして逸脱行動に関する興味深い研究報告であったが、一つのセッションにまとめるには難しい側面もあった。

まず、台湾師範大学の大学院生、王止敬さんによる“A study on the variation of spectators composition of the Chinese Professional Baseball League”は、1990年に設立された台湾プロ野球の観客動員と、その構成の特徴と変化を、すでに公表済みの数量的なデータを再整理、統合することで明らかにしようとするものであった。

彼によれば、台湾のプロ野球は、1996年の八百長事件をきっかけに、大きく人気を落とし、翌年台湾メジャーリーグが設立されたことが、さらに観客を分散させ、観客動員は減少を続けた。2003年の両者の合同により、観客動員は一時的に回復したものの低迷は続いている。そのなかで、ファンの構成は、徐々に女性が増加しているものの、男性が中心であり、その中でも、19-24歳が過半数を占め、さらに学生が圧倒的に多くを占めている状況は変化していないことを明らかにした。

次に、東京学芸大学大学院の村上智恵さんは、「観客の視線とパフォーマンス ～舞台と競技場を比較して～」というテーマで、観客の視線がプレイヤーに与える影響について、舞踊と一般的なスポーツを比較して検討した。報告者によれば、舞踊が予め見られる身体を想定し観客の前に現れ、それが観客のまなざしによって影響を受けることがあってはならないとする。つまり舞踊は、「予め意図された身体図式を実現する」行為であるのに対し、スポーツは観客の視線に対する意識が、そのパフォーマンスを変化させ、また自らそのパフォーマンスを変更することもあるとする。舞踊が演じる時間は予め想定され固定されていて、時間の流れとともに「反省的注意」を必要としないのに対し、スポーツ場面には「流れる時間」が存在していて、そこでの「反省的」意識が時として、観客の目を意識して十分なパフォーマンスを得られない結果とをも生起するという。

次に法政大学の小林正幸さんによる「現代社会における『聖なるもの』の形骸化～プロレスファンの事例分析を通じて～」においては、近代社会における「聖なるもの」の形骸とその変容を、デュルクムや、モラン、バーガーなどを参照しつつ整理した。そして、その上で、プロレスファンのfanatic(熱狂)なあり方とプロレス自体やレスラーとの関係において、この「聖なるものの形骸化」の進行を示す試みであった。報告者は、4つの受容モードとして、「スターシステムの」「記号論的」「虚構自覚的」「メディア戦略的」「コミュニケーション的」をファンのインタビュー調査に基づいて提出し、それぞれのモードについて解釈を試みた。

最後に奈良教育大学の高橋豪仁さんによる「スタジアム空間の管理に関する研究～プロ野球の特別応援許可規定について～」は、日本のプロ野球の観客による逸脱行動を振り返り、その管理の進展を明らかにするものだった。2005年日本野球機構が提示した試合観戦契約約款において特別応援許可規定が定められ、06年から12球団が統一して私設応援団が規制されることとなったが、ここに至るまでの一般ファンの逸脱行動や私設応援団とそれに関わる暴力団の犯罪が頻発した事実を丹念に例示した上で、これに対する対策として、徹底した規制と排除、管理と監視が進展したことをあげ、現在のプロ野球観戦は、この徹底した管理のもとでの、自発的な応援と自由な感情表現が保障される矛盾を明らかにした。

ヨーロッパにおけるファンの監視と排除に関する研究との接合がさらに期待される。

文責：黒田 勇

3. スポーツ・フォー・オール (Sports for All) 座長：内海和雄 (一橋大学大学院)

朴 永晔 パク・ヨンギョン（神戸大学大学院）

韓国における生涯スポーツの活動に関する研究－ソウル近辺のハイキング活動に参加する中高齢者を中心に－

神野賢治（福岡大学）

体育・スポーツ系学生の「ニュースポーツ志向性」とその要因検討－カリキュラムを通じた“変化”に着目して－

松田恵示（東京学芸大学）

グラウンド・ゴルフとパークゴルフ－障がい者のアミューズメントの視点から－

①朴永晔（パク・ヨンギョン：神戸大学大学院）「韓国における生涯スポーツの活動に関する研究－ソウル近辺のハイキング活動に参加する中高齢者を中心に－」

近年、韓国でも国民のスポーツ参加要求が高まっている。それは「週休2日制」や余暇時間の増大、健康ブームそして2002年のワールドカップの刺激が輻輳したものである。

朴氏はソウル近辺でハイキングを楽しんでいる中高齢者を対象に、その活動に影響を及ぼす社会的支援と生活満足度の関係を明らかにせんとして、約600名のアンケート調査を実施した。韓国で中高齢者が実施しているスポーツ種目は「ハイキング・山登り 46.2%」「体操 20.3%」「ウォーキング 6.3%」と、圧倒的にハイキング・山登りが多い（韓国文化観光省 2003）。それは都市圏に比較的近く山が多いせいもある。しかし、そうしたハイキング・山登りが多い割には、それらの活動に影響を及ぼす社会的支援と満足度に関する研究は少なく、その点にメスを入れようとした。

調査によって支持された仮説は、「健康状態がよい中高齢者は、生活満足度も高い」ことや「社会的支援が多いほど、生活満足度も高い」一方、「ハイキング・山登りの参加経験が長い」人あるいはそれへの「のめり込み意識が高ければ」「生活満足度も高い」という内容は棄却された。

本研究はハイキング・山登りに限定されたために、研究結果を中高齢者の一般的な傾向として解釈するには困難な部分もあることが自覚され、また今後は他の種目や日韓の国際比較研究なども展望している。

以上、中高齢者のハイキング・山登り参加者の個人的属性、生活満足度、ハイキング参加頻度、のめり込み意識、健康状態、社会的支援への感想について調査である。人口の高齢化は韓国に限らず日本を含めた国際的傾向であり、こうした研究の蓄積、比較研究は貴重であり、そこから多くの施策が示唆される事が期待される。フロアからの指摘にもあったが、ハイキング・山登り参加者は比較的中産階級以上ではないか、現実の貧富格差拡大の中で底辺層の参加状況、あるいはより廉価である「体操」「ウォーキング」参加者はどうなっているのかという視点も重要であろう。同じく、2世帯以上が60%であるという数値を持って「儒教思想を反映している」とのまとめている点に対して、世界的に見れば経済発展との関連が大きいのではないかと指摘もあった。そして今後の課題として、今回の発表内容を政府などのスポーツ政策の政策的跡づけたとの関連で分析する必要性も指摘された。今後の発展性と可能性を大きく内包した発表であった。

②神野賢治（福岡大学）「体育・スポーツ系学生の「ニュースポーツ志向性」とその要因検討－カリキュラムを通じた変化に着目して－」

「ニュースポーツ」は未だにその普及度は高くない。将来の指導者である体育・スポーツ系学生のニュースポーツ観を変容させるべく、本調査研究は計画された。学生に対する調査は、「過去（学校期）のニュースポーツとの関わりやカリキュラム受講前のニュースポーツ観を把握すること」「受講後のニュースポーツ観の変化、あるいはニュースポーツとの関わり方などの意識変化について明らかにすること」「その要因について可能な限り検討すること」などを目的とした。カリキュラムは「生涯スポーツ演習」（半期）であり、対象は2年生約120名である。

若干の結果と考察を例示すると、競技成績を重視している者は、その他の者に比べニュースポーツをレクリエーション的と捉えている傾向にある、受講後に約7割弱の学生が日常活動にニュースポーツを取り入れたいと考え、指導者を目指す意欲を示した。さらにニュースポーツの指向性が高い者の対人関係スキル（特に目的達成スキル）の獲得度が高いことも確認された。尚、本研究についてサンプル数や対象範囲の狭さについての制約などが自覚されている。今後の課題として、標本領域の拡大、精選された質問項目、授業等を用いた実証的・学年を追った継続的調査などが挙げられている。

この研究は、「生涯スポーツ演習」の内容・方法と学生の意識変容との関連が中心的であり、今後の課題で指摘されているように、演習内容・方法の詳細に対する学生の反応・評価などの検討を期待する、等の発言もなされた。今後の継続の課題が明確になったのではないだろうか。それによって、ニュースポーツに関する「生涯スポーツ演習」の確立へと向かうならば、大きな成果となるであろう。と同時に、こうした研究は一定期間の実践的研究として継続することに意義がある。

③松田恵示（東京学芸大学）「グラウンド・ゴルフとパークゴルフ―障害者のアミューズメントの視点から―」

表題に見るように、類似した2つの種目の相違点を、「障害者のアミューズメントの視点」の有無の違いから検討したものである。もちろん両者共にニュースポーツとして1980年代の初頭に意識的に創作されたものである。グラウンド・ゴルフは「どこでも・だれでも・いつでも」できる簡便性を特徴とするが、パークゴルフはその用具の高価さ、専用のパークゴルフ場の設置という特性が、参加者を「余裕」の所有者（中産階級者以上）に制約する傾向を持つ。そして障害者の参加への配慮も強くなされ、パークゴルフの特徴の1つとなっている。また、パークゴルフは北海道や沖縄での地域おこしの一環ともなっている。

報告者は、パークゴルフが「土地に根ざした」と報告したが、「ゲートボール自体も土地に根ざしているのではないか」、「土地に根ざすという意味の厳密化が必要ではないか」との質問も出され、一層の課題が明確化された。

グラウンド・ゴルフとパークゴルフという文化のそれぞれの特性と普及形態の違いとその背景との関連、障害者の参加に関する「遊びの三角形」理論との関連（特に障害者に対する内部からの「誘い込み」要因の重視）、既述した「土地に根ざす」という概念の検討、さらには行政的支援の在り方など、今後の重要な課題が鮮明化された。

以上スポーツ・フォー・オールに関わる3題に共通する視点として、いずれも長期的継続を必要とする研究の一端を報告した。したがって、単に今回だけの報告で全体像を把握し評価することは不可能であるが、一方、今後の継続の中でその全体像が追求されるならば、スポーツ社会学への大きな寄与をな

し得る可能性をそれぞれが有していることも明確であった。その可能性を追求して欲しいものである。

文責：内海和雄

4. スポーツの普及 (Sport Promotion) 座長：高峰 修 (明治大学)

秋吉遼子 (神戸大学大学院)

公共スポーツ施設の利用者特性による満足度の比較 -指定管理者施設のケーススタディー-

中澤篤史 (東京大学大学院)

青少年の学校/地域スポーツへの参加と家庭背景 -質問紙調査の分析を通して-

宮坂麻耶 (東洋英和女学院大学)

大学教職員の学内スポーツ施設活用状況と活用促進課題

このセッションでは、「スポーツの普及 (Sport Promotion)」というテーマのもと上記3題の発表が行われた。秋吉さんによる「公共スポーツ施設の利用者特性による満足度の比較-指定管理者施設のケーススタディー」では、指定管理者制度を導入した公共スポーツ施設を事例対象とし、その施設の利用者を対象とした質問紙調査の統計分析結果が報告された。「コスト削減」と「サービス向上」を主たる目的として導入された指定管理者制度であるが、制度導入後にはその評価の基準が必要になる。そうした評価基準を提示することは、我々の分野に求められている重要な仕事の一つとしてあるだろう。秋吉さんの発表は、評価基準として施設利用者の特性と満足度に着目し、オーソドックスな調査方法や分析の枠組みを用いたものであったと言える。施設利用者の特性や満足度に関しては、指定管理者制度を導入していない公共スポーツ施設、あるいは商業スポーツ施設の利用者を対象とした研究が蓄積されている。今後はそうした先行研究の成果との比較、あるいは研究手法を発展させつつ、指定管理者制度を導入した施設として適当な評価基準について分析を進められることを期待したい。また施設利用者の目から「サービス向上」については見えやすいが、「コスト削減」をどのような基準で評価するのか、さらには「サービス向上」と「コスト削減」の両立をどのような匙加減で評価するかといった課題も残されているだろう。

中澤さんは近年、運動部活動に関する調査研究を進めており、今回の発表「青少年の学校/地域スポーツへの参加と家庭背景-質問紙調査の分析を通して-」もその延長線上にある。今回の発表では、関連分野の先行研究を踏まえて、これまで一括りにされてきたスポーツの場を「学校スポーツ」と「地域スポーツ」に分けて検討し、またこれら2つの場におけるスポーツ参加を説明する変数として経済的要素も含めた「家庭背景」に着目している。分析の結果として、地域スポーツへの参加が家庭の経済格差と関わっていきそうなこと、またそうした経済格差によるスポーツからのドロップアウトに対して学校スポーツはセーフティーネットとして機能しうることが示された。経済格差と称される現象が青少年のスポーツ活動にも影響を及ぼしうることを示唆する興味深い結果であろう。ただし、今回の発表では分析手法としてカイ二乗検定を用いているため、変数間の因果関係は推測の域を出ず、説明変数間の相互関連の影響も考慮する必要がある。また質疑の際の意見にもあったように、学校/地域スポーツの基盤となる地域そのものの特性についてもより把握することが望まれる。今回の発表結果をさらに確かなものにするためにも、より地域に軸足を置き、そこから得た知見に基づく精密な因果モデルを構築し分析を進められることを期待したい。

宮坂さんの発表は、ある大学内スポーツ施設の大学職員による利用促進をテーマにしており、前者2題の発表と比べるとミクロな視点を持ったプロモーション研究であると言える。対象となる大学には温水プール、フィットネスジムからなるスポーツ施設があり、教職員は無料でこの施設を利用できる。その利用状況と生活・運動習慣、健康に関する意識などについて、全教職員を対象として質問紙を用いた調査が行われた。主に単純集計とt検定による分析の結果、たとえ学内に無料で使えるスポーツ施設があったとしても、そのことが教職員の運動実施に結びつくわけではないこと、学内スポーツ施設の利用率を高めるためには健康運動相談や運動プログラムなどのソフトが必要であることなどが示された。しかし、本調査研究から得られる知見を現場に還元するためには、さらに詳細で複雑な分析が必要になると思われる。

以上の3題の発表では、質問紙によって収集した数値データを統計的に処理するという手法が用いられたが、これらの量的研究に共通して気になったことは、スポーツ施設や地域、職場といった各研究対象の場に身を置き、その実情をより深く把握すべき、という点であった。そうした努力が、統計処理の結果として示された数値の解釈を、あるいは今後検討すべき統計的因果モデルを、現実味を伴う豊かなものにすると考えている。

文責：高峰 修

5. ルールと道徳 (Rules & Morality) 座長：杉本厚夫 (京都教育大学)

張 文威 Chang, Wen-Uei (台湾師範大学)

The ambiguity within motorcycle sports in Taiwan

松宮智生 (国士舘大学大学院)

総合格闘技に関する一考察 -反則規定の類型を中心として-

笹生心太 (一橋大学大学院)

ボウリングの「スポーツ」化に関する考察

熊安貴美江 (大阪府立大学)

(財)日本体育協会加盟団体における倫理問題に対する取組み状況

張報告は、台湾における暴走族 (motorcycles gangs) とバイク愛好者 (leisure riders) のバイクの改造、走行スタイル、組織と社会的背景の違いについて比較研究し、その特徴を明らかにした。ただ、報告は両者の社会的行動の現状分析にとどまっており、できれば、暴走族は自分たちのパフォーマンスを顕示するために観客を必要とするが、バイク愛好家はそれを必要としないといった社会学的考察があれば、スポーツ社会学の研究として有益であったと考えられる。

松宮報告は、総合格闘技における各団体の反則規定の違いに注目し、そのひとつの「パンクラス」を事例として調査し、「総合」としての反則規則のあり方について提案した。スペクテーター・スポーツとしての総合格闘技では観客の要求が反則を規定しているといっても過言ではない。しかも、反則によって観客は興奮することを考えるならば、総合格闘技の反則規定は、単なるスポーツの反則規定とは異なり、パフォーマンスの演出のための規定ということではできないだろうか。この点に関する考察が欲しかった。

笹尾報告は、多くのスポーツ種目がレジャー活動からスポーツに変容するプロセスを明らかにするために、ボウリングを事例として、そのスポーツ化について考察した。その結果、とりわけ施設への依存

が強いボーリングは、経営的な面からスポーツとして認識されるほうが有利であった。しかし、大衆化を図るためにはレジャー的要素も残していく必要があり、娯楽施設としての面も保持しながらもスポーツ化を目指していったところに特徴があると言う。できれば、ボーリングのスポーツ化にメディアがどのように関与していたかについての言及も欲しかった。

熊安報告は、スポーツにおける暴力やセクシャル・ハラスメントなどの倫理問題をスポーツ組織はどのように扱っているかを明らかにするために、(財)日本体育協会の加盟団体に調査を行い、現状の分析を行った。その結果、倫理規定の制定、倫理委員会の設置、予防対策活動の実施、処理規定など、積極的な取り組みがなされているとは言い難かった。できれば、これらの倫理規定等が具体的に機能しない社会的要因についての考察もして欲しかった。

いずれにせよ、これらの報告は、本セッションのテーマである「ルールと道德」が、自己と他者の「見る－見られる」という「まなざし」の相互作用と、道德のルール化における機能分析が必要なことを、われわれに開示してくれた点で、非常に有意義なセッションであったといえよう。 文責：杉本厚夫

6. 野球 (Baseball) 座長：清水 諭 (筑波大学)

山崎尚志 (神戸大学大学院)

野球通説の検証 -出塁の仕方について-

蔡 孟諺 Tsai, Meng-Yen (台湾師範大学)

Current Status of Corporate Social Responsibility on Taiwan Professional Baseball Teams

林 伯修 Lin, Po-Hsiu (台湾師範大学)

コーチの目から見た台湾原住民と野球

1. 山崎尚志 (神戸大学)・加藤英明 (名古屋大学)：野球通説の検証：出塁の仕方について

発表された山崎氏は、共同研究者の加藤氏と同様、行動経済学 (行動心理学) を専門としている。彼によれば、人々はすべてを正しく分析できておらず、そこに「代表性に関する錯覚」の証明を行う意義があるとする。例えば、「(新人だった選手の) 2年目のジンクス」「コイントスの心理 (表ばかりが続くと次に裏が出る気持ちになる)」「宝くじ販売所の問題 (過去に1等の当たりが出た所に行列ができる)」など、ある出来事に目がくらむ人々の行動、すなわち象徴的な意味を解釈して行動する人間の心理を数理統計的に分析するものである。今回発表されたテーマは、野球において「先頭打者に与える四球は最も悪い」という「通説」を検証するもので、具体的には、「四球やエラーによる出塁は、安打よりもその後の展開が本当に悪いのか」を分析している。2005年度セ・パ公式戦全846試合を対象に、先頭打者にシングルヒットを打たれた場合と四球を出した場合で、インングの得点確率並びに得点平均がどのようになったのか、そしてそれがその後の自チームの攻撃時に影響したのかどうかを数式にデータを入れて分析した。

結果は、どちらも通説を証明するデータでないことが明らかにされた。「ノーアウトからの四球は安打と違って流れを変えますよ」と解説者が言う言説に確証はないのだ。そこで山崎氏は、通説が存在する理由を四球がらみの失点が記憶に残る、すなわち「人の記憶の曖昧さ」ゆえだと結論づけた。

スポーツ関係の学会で初めての発表ということだったが、このような「通説」を数理統計的なデータ分析によって反証 (実証) していくことは、プレイヤーやアスリートの心理学として有効なデータを供

与することになるだろう。しかし、データを厳密に揃えることは至難の業と言わざるを得ない。プロ野球のデータでは上記の結果としても、「高校野球のレベルではどうか」との質問があったが、同じレベルである期間データを収集することは不可能なのかも知れない。しかし、島根県における高校野球の公式戦（1年間）を調べると、この「通説」は実証されたとのこと。だとすると「通説」は生きていることになるのか、ならないのか？山崎氏は、「ホットハンド（バスケットボール・プレイヤーが波に乗って連続してポイントを上げること）」を例に挙げ、これもまた学術的な証明はなされていないと述べていた。では、なぜ人々はまれに見るパフォーマンスを「ノリ」だとか「ゾーンに入った」などと表現し、記憶に留めようとするのか。事実の誤解と記憶、そして表象化の問題は、本発表のような視点から探求されることでより深い分析ができるだろう。

2. Meng-Yen Tsai (Graduate Institute of Sports and Leisure Management, National Taiwan Normal University): Current Status of Corporate Social Responsibility on Taiwan Professional Baseball Teams

Tsai氏は、企業の社会的責任について文献をレビューし、台湾プロ野球球団の企業としての社会的責任(CRS)の現在の状況を捉えようとした。具体的には、プロ球団の顧客、雇用者、株主、コミュニティ、そして環境に対して、①組織防衛 ②法令遵守 ③経営 ④戦略 ⑤市民からの好意 といった視点で分析している。

1989年に創設された台湾プロ野球連盟は、現在6球団あり、1試合の観客数平均は約2,000人(2007年)とされる。Tsai氏は、それらのうちBrother Elephants、La New Bears、Chinatrust Whales、Dmedia T-REXの4球団に対して、資料や球団関係者へのインタビューによって分析した。4球団ともCRSとして、金銭的、物的な支援、そして技術的な援助を挙げており、野球文化の維持、発展のためにそれが重要だと認識しながらも、八百長などプロ野球界の悪いイメージによる経済的な不振で強くコミット仕切れない状況があぶり出された。

この発表に対して、フロアから台湾のプロ野球界の現状に対する質問(観客数減少の原因、マーケティング戦略の実状、コミッショナーの権限、ホーム球場保持の有無など)のほか、球団とフランチャイズの問題などが議論された。表層的には企業マネジメントの問題ではあるが、この視点を顧客やコミュニティといった所にまで深めていくと、経済と文化が融合したパースペクティブでの分析が期待できよう。

3. 林伯修(台湾師範大学運動與休閒管理研究所)・王宗吉(南亞技術学院觀光與休閒事業管理学系) : コーチの目から見た台湾原住民と野球

セッション最後のテーマは、民族の問題。台湾の原住民族(政府が「国定原住民族」として12族を規定)は、2007年12月現在484,174人で総人口の約2.1%だが、台湾プロ野球選手183名中76名、実に41.5%を占め、中でも阿美族の選手は76名中66名(86.8%)を占めている。発表者の林氏は、Hartmann(2000)が提起した「過度代表性(over-represented)」の概念を参考にしながら、以下のような問いを立てた。

- ①原住民族選手はコーチの目からして、本当に能力が高いのか(身体、心理、社会性)
- ②彼ら原住民族選手が野球に熱心に参与するのはどのような社会的要因があるのか

③どのように原住民族選手に関する言説が構築されてきたのか。漢民族との関係はどのように捉えることができるのか

④原住民族選手に対するコーチの評価をふまえた上で、それでも彼らが野球を選択する背景は何か

⑤こうした原住民族選手の問題性は、野球に表出される「台湾ナショナリズム」とどのように関係するのか

今回は特に①②に焦点を当て、原住民族コーチ（大学1名）と漢民族コーチ（高校2名、大学1名、プロ1名）計5名にインタビューを行った。確かに原住民族選手はスピード感などにあふれ、身体能力に優れるとの評価を得たのだが、心理面、そして「社会的コミュニケーション」の面からすると漢民族とそうでないコーチの評価が分かれることもあり、それほど高い評価に至らなかった。しかしながら、原住民族の人々がなぜ野球というスポーツを選択するのか。フロアからの質問もあり、議論はここに集約されていった。

林氏によれば、土地を奪われた原住民族が都市に移住させられ、建築現場などでの労働者になったにもかかわらず、東南アジアからの移民労働者によって職を奪われてきた現実がある。確かに「プロ野球村」があるほど阿美族選手が野球に力を注いできている。しかし、「身体能力が高い」「遺伝子を持っている」と彼ら自身が信じることで問題が生じているのではないかと林氏は述べる。そこには原住民族選手の神話とそれを解釈する人々の多様性に加え、原住民族の人々が生きる状況を見通す研究が不可欠である。この研究は、漢民族と原住民族との関係、そして野球で昂揚する「台湾ナショナリズム」の問題にも波及するものであり、さらなる研究が期待される。

本セッションは、野球という文化をそれぞれ異なった方法でアプローチしたが、それ故に、野球が私たちの生きている世界をどのように捉えることを可能にする媒介（メディア）であるのか、新たな視点が加わったように思う。

文責：清水 諭

2. 2007 年度総会報告

日本スポーツ社会学会 2007 年度総会議事録

2008.3.17 於 中京大学

1.開会

2.会長挨拶

伊藤公雄会長より挨拶があった。

3.議長の選出

奥田会員が選出された。

4.審議事項

①2007 年度事業報告について

- ・編集委員会：『スポーツ社会学研究第 16 巻』編集・刊行
- ・研究委員会：研究テーマ「ナショナリズムとスポーツの今日的課題」と設定。第 17 回学会大会では、メディア言説からのアプローチとして、その方法論に関する議論も含め、「方法的ナショナリズムの諸問題：メディア言説とナショナリズムの共犯性を批判的に検討する」をテーマにシンポジウムを行い、若手研究者の研究促進のために例会やミーティングを企画した。また、ISSA 国際会議京都大会の企画などを行った。
- ・国際交流委員会：第 17 回学会大会において、日韓研究交流シンポジウム「アジアにおける伝統と社会変動」を開催した。また、ISSA 国際会議京都大会の企画・運営を行った。
- ・広報委員会：ISSA 国際会議京都大会に連動させて、学会 HP を更新した。また、HP の管理を外注システムに変更し、会報 46・47 号を発行した。

②2007 年度決算報告書・監査報告について（後掲資料参照）

配布資料の「2007 年度決算書(案)」に沿って、松田事務局長からの説明後、牧野紀子・平野秀秋幹事による会計監査報告があった。適正に処理されているということで、収支の部総額¥2,552,417、支出の部総額¥2,498,535、繰越金¥53,882 が承認された。

③2008 年度事業計画について

通常の各委員会・事務局の活動に加え、ISSA 国際会議京都大会開催に関わる活動が提案され、承認された。

④2008 年度予算案について

編集委員会が 2007 年度に経費実績により減額されたが、年 2 回発行体制を見越して増額、また、事務経費が選挙・会員名簿作成のため増額された。研究委員会は前年度経費実績により減額、広報委員会はサーバー維持を外注したため減額となり、総額¥2,361,882 が提案され、承認された。

⑤第 18 回学会大会の開催について

清水研究委員長より、第 18 回学会大会は黒田会員を開催担当とし、2009 年 3 月 23、24 日を予定として、関西大学で開催することが提案され、承認された。引き続き、黒田会員から歓迎の挨拶があった。

⑥その他

- 1)購読会員の年会費の変更について、年額¥3,000 とすることが松田事務局長から提案されたが、研究誌の 2 回発行が近づいているために、継続審議されることとなった。
- 2)研究誌の発送に関わる会員名簿の管理について、創文企画に委託したい旨、松田事務局長から説明があり、承認された。
- 3)学会のビジュアル・アイデンティティについて、松田事務局長から原案に基づいて説明があり、承認された。

5.報告事項等

- ①中江編集委員長より、研究誌の年 2 回発行体制への移行スケジュールが報告された。
- ②松田事務局長より、会員動向についての報告があった。

6.閉会

以上
(文責 松田恵示)

3. 理事会報告

日本スポーツ社会学会 2007年度 第4回理事会議事録

日時 平成20年3月17日(月) 午前10時～12時

場所 中京大学名古屋キャンパスセンタービル(0号館)7階 07D教室

出席者(敬称略) 伊藤、菊、中江、野川、杉本、清水、内海、黄、飯田、山下、山口、松田、平野(監事)、牧野(監事)、西山(大会実行委員長、ob)

欠席 中島

配布資料 第3回理事会議事録、総会議案、各委員会決算・活動報告書及び19年度予算申請書・活動予定、学会ロゴ案、入会者一覧、会則、日本スポーツ体育健康科学学術連合資料

配布資料確認

会長挨拶

前回議事録確認

1. 審議事項

1) 総会議案について

(1) 平成19年度事業報告及び決算報告

事務局、編集、研究、国際交流、広報の各委員長より、資料に基づき平成19年度事業ならびに決算が報告され、国際交流委員会における修正が認められた後に了承された。ただこの中で、シンポジストに対する謝礼にバラツキがあることが議論され、学会企画の場合、一律3万円とすることが定められ、内規として明記することとなった。また、国際交流委員会から、相互開催における「年度」と「年」の取違いとその後の話し合いを中心とした、韓国との国際交流事業における事情説明がなされた。

(2) 監査について

牧野監事より、監査結果についての報告があった。決算書について承認したが、今年度に対する追加作業として、各委員会が出納簿を提出し事務局において確認することと、来年度については、特別会計の決算を適切に行うように要望があり了解された。

(3) 平成20年度事業計画及び予算案

事務局、編集、研究、国際交流、広報の各委員長より、資料に基づき平成20年度事業ならびに予算が報告され了承された。この際に、来年度事業の課題点として、国際交流委員会の事業内容の検討、広報委員会と事務局の連携と役割分担の明確化、各委員会への予算配分の時期とメールによる入金手続きの確認手順、について指摘があり議論の上、特に理事会として留意することとなった。

(4) 平成20年度学会大会について

平成 20 年度学会大会は、黒田会員を中心として関西大学で開催する案が事務局より提案され了承された。また、会場校の事情から、開催期日については、平成 21 年 3 月 22 日～24 日のうち 2 日間とすることが提案され了承された。

(5) 購読会員の年会費の変更について

研究誌が創文企画より市販されていることから、購読会員の年会費を現行の 3000 円より 2500 円に会則改定を行うことを総会に諮る案が事務局より提出され了承された。

(6) 研究誌の発送に関わる会員名簿の管理について

従来、学会大会時に手渡しし、残りを郵送していた研究誌の発送体制について、創文企画よりすべて発送とすること、ならびに、そのために、住所、名前部分の名簿を創文企画に委託管理を依頼することを総会に諮る案が事務局より提出され了承された。

(7) 学会のビジュアル・アイデンティティについて

学会のビジュアル・アイデンティティを確立するために、ロゴとシンボルマークを制定することを総会に諮る案が事務局より提出され了承された。

2) 学会大会の発表使用言語の規定について

海外(特に台湾)からの大会報告希望者の増加に関わって、使用言語の規定について事務局より提案がなされ、また、今年度学会における実情と直面する課題等について西山実行委員長から説明があった。議論の結果、様々な問題とも関連することから、委員長会議を開催し、本問題について検討した上で、再度理事会に原案をだすこととなった。

3) 研究誌の 2 回発行体制について

編集委員長から資料に基づいて、2009 年度よりの研究誌年 2 回発行体制の移行のタイムスケジュールが説明され、また、その際の委員会構成、予算などを主な論点とする課題についても提示があった。課題となる点を留意しつつ、円滑に年 2 回体制に移行できるように理事会として努力することが了承された。

4) ISSA 京都大会の準備進捗状況について

大会準備委員会委員長より、資料に基づき進捗状況について報告があり了承された

5) 海外在住者の取り扱いについて

この件についても、2)の海外学会参加者の取り扱いの件と関連が深いため、委員長会議により検討し、再度、原案を提出することとなった。

6) 日本スポーツ体育科学学術連合への加入について

参加の呼びかけに対して、会員の利益に観点から、参加することを総会に諮ることを原案としたい旨、事務局より説明があり了承された。

7) 入退会者について

資料に基づき事務局より報告があり了承された。

2. 報告事項

1) 編集委員会

委員長から「スポーツ社会学研究」今号の内容が説明され、無事発行したことが報告された。

2) 研究委員会

委員長から課題研究と若手研究会の取り組みについて報告された。

3) 国際交流委員会

委員長から、HPの海外スポーツ社会学会とのリンクについて検討中であることが報告された

4) 広報委員会

現在、次号会報を編集中であることが報告された。

5) 事務局

次年度に予定されている会員名簿の作成について準備を進めていること、ならびに現在の会員数について報告された。

- 次回理事会は、委員長会議の進み具合をみて、事務局より調整連絡し、9月上旬をめどに開催することとなった。

以上
(文責 松田恵示)

2007年度 決算書(案)

収入の部: 2,552,417
 支出の部: 2,498,535
 次年度繰越金: 53,882

収入の部

項目	内訳	予算(A)	実績(B)	差額(B-A)	備考
繰越金		166,759	166,759	0	
会費	正会員(2005年度~@7000)	2,100,000	1,946,000	-134,000	278件
	正会員(2004年度迄@5000)		20,000		4件
	学生会員(2005年度~@4000)	300,000	264,000	-21,000	66件
	学生会員(2004年度迄@3000)		15,000		5件
	購読会員	30,000	27,000	-3,000	9件
	賛助会員	60,000	60,000	0	2社
研究誌販売		60,000	52,920	-7,080	創文企画販売72冊
その他	銀行利息・不足分入金等	10,000	738	-9,262	
合計		2,726,759	2,552,417	-174,342	

支出の部

項目	内訳	予算(A)	実績(B)	差額(A-B)	備考
編集委員会	研究誌15巻編集費	700,000	700,000	0	
研究委員会	プロジェクト研究補助	400,000	400,000	0	
国際交流委員会	日韓交流費等	300,000	300,000	0	
	ISSA Japan 会議費	400,000	300,000	100,000	
広報委員会	サーバー維持費等	155,000	155,000	0	
学会大会経費	学会大会運営補助	200,000	200,000	0	
理事会経費	旅費・会議費等	345,000	247,905	97,095	
通信費	研究誌の発送費等	90,000	86,837	3,163	
事務局経費	アルバイト料・文房具等	100,000	106,798	-6,798	
手数料	銀行振込手数料	5,000	1,995	3,005	
積立金	研究誌・国際会議等	0	0	0	郵便局積立*
予備費		31,759	0	31,759	
その他	上記項目外支出	0	0	0	
合計		2,726,759	2,498,535	228,224	

繰越金 53,882


(2008年3月10日締め)

所在	所在名	金額	備考
銀行	三菱東京UFJ銀行 国分寺支店	5,197	
郵便振替口座	郵便局	0	
現金	事務局	48,685	
*郵便積立	郵便局(ぱるる)	550,000	


帳簿、領収書、通帳等を監査した結果、上記の決算書どおり適切に処理されていることを認めます。

2008年3月17日

監事

牧野 紀子 

監事

平野 秀秋 

2008年度 予算書(案)

収入の部: 2,361,882
支出の部: 2,361,882
差引残高: 0

収入の部

項目	内訳	2008年度	2007年度	前年度差額	備考(件数)
繰越金		53,882	166,759	-112,877	
会費	正会員	1,848,000	1,966,000	-118,000	264
	学生会員	300,000	279,000	21,000	75
	購読会員	30,000	27,000	3,000	10
	賛助会員	60,000	60,000	0	3
研究誌販売		60,000	52,920	7,080	創文企画
その他	銀行利息・不足分入金等	10,000	738	9,262	
合計		2,361,882	2,552,417	-190,535	

支出の部

項目	内訳	2008年度	2007年度	前年度差額	備考
編集委員会	研究誌17巻編集費等	900,000	700,000	200,000	18巻準備
研究委員会	プロジェクト研究補助	300,000	400,000	-100,000	
国際交流委員会	日韓交流費等	300,000	300,000	0	
ISSAセミナー	ISSA Japan会議費	0	300,000	-300,000	
広報委員会	サーバー維持費等	100,000	155,000	-55,000	
学会大会経費	18回学会大会運営補助	200,000	200,000	0	
理事会経費	旅費・会議費等	200,000	247,905	-47,905	
通信費	研究誌等の発送	90,000	86,837	3,163	
事務経費	事務補助アルバイト等	250,000	106,798	143,202	選挙、会員名簿作成
手数料	銀行振込手数料	5,000	1,995	3,005	
積立金	研究誌・国際会議等	0	0	0	
予備費		16,882	0	16,882	
合計		2,361,882	2,498,535	-136,653	

特別会計

収入の部	ISSA準備積立金	550,000
支出の部	ISSA運営補助	550,000
差引残高		0

4. 委員長会議報告

日本スポーツ社会学会委員長会議議事録(案)

2008.4.12

日時 平成 20 年 4 月 12 日(土) 午後 1 時～午後 4 時

場所 筑波大学大塚キャンパス E361 演習室

出席者 菊(理事長), 清水(研究委員長), 中江(編集委員長), 杉本(国際交流委員長), 野川(広報委員長)

委員長会議議事要旨説明 (理事長)

資料確認

1. 議事内容

1) 本学会における国際化についての方針について

理事会において継続審議事項になっているいくつかの「国際化」に関連する問題について、包括的に意見が交わされた。学会大会における「台湾」からの参加者の急増とそれに関連する諸問題、海外在住の会員に関する問題、研究誌の言語の問題、国外学会との連携、情報交換の問題、HP の国際化の問題等において、現状の認識と課題の共有が行われた。この結果、アジアを中心として順次、国際化への整備を行う方針は確認されたものの、対応に必然性のあるものから、ひとつずつ取り組むことでコンセンサスを形成した。そこで、「台湾」からの参加者に関する問題については、台湾の林先生を通じて、ご協力を得られるようにお話しすること(研究委員会、事務局から)、学会大会時に発表数を決めた上でアジアセッション(仮称)を理事会内規として設定する方向で大会実行委員会と相談すること、研究誌においては日本語と英語の 2 言語に使用言語を規定すること、国外組織との連携については国際交流委員会で検討すること、が了承された。

2) 韓国スポーツ社会学会との交流について

国際交流委員長より、昨年度来の経緯が説明され、「年」と「年度」のとり違いが誤解を生んでいたことが確認された。5月に山下、杉本理事が韓国を訪問して調整とお詫びを行うとともに、ISSA 開催時に、会長、事務局長を招待することが了承された。また窓口を、国際交流委員会とするとともに、韓国側の事務局変更時には、通知してもらうことなどを要請することになった。

3) 委員会活動と予算の見直しについて

研究誌の年 2 回発行体制に関わる経費の増加と、学会納入状況、会費値上げ後の執行状況を鑑み、次年度予算においては、大幅な見直しを行う方針が理事長より説明され了承された。

4) 会員の名簿管理について

創文企画との打ち合わせないようについて事務局から報告され、年2号体制への以降も踏まえた上で、行程や費用、約款等を詳細に取り決め、今年度後半には実施することを確認した。

(文責 松田恵示)

◆編集後記

この度48号の会報をスポーツ社会学会HP上に掲載させて頂きました。この会報発行の御知らせが回っている頃には、京都で第5回国際スポーツ社会学会（ISSA）が開催されていると思います。日本を問わず、海外から多くの研究者が発表を行う素晴らしい大会になると思います。多くの会員の皆様が有意義な学会ライフを送られることを心から願っております。

また、今回の会報から「日本スポーツ社会学会 事務局だより」という形でメーリングリストを通してメールを送らせて頂きますので、会員の皆様ご理解の程よろしくお願い致します。（山口志郎）

◆学会への連絡、入退会、住所・所属・メール等の変更、会費納入、その他の各種手続き

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

日本スポーツ社会学会事務局

松田 恵示【事務局長】

TEL：042-329-7643

FAX：042-329-7643

E-mail：secretary@jsss.jp

◆会報への投稿

〒270-1695 千葉県印旛郡印旛村平賀学園台

順天堂大学

野川 春夫【会報担当】

E-mail：doc@jsss.jp

◆学会公式ホームページ

日本スポーツ社会学会公式ホームページ

<http://www.jsss.jp/>